

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年6月25日

【事業年度】 第95期(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

【会社名】 株式会社筑波銀行

【英訳名】 Tsukuba Bank, Ltd.

【代表者の役職氏名】 取締役頭取 生田 雅彦

【本店の所在の場所】 茨城県土浦市中央二丁目11番7号

【電話番号】 (029)821局8111(代表)

【事務連絡者氏名】 執行役員総合企画部長 岡野 強志

【最寄りの連絡場所】 東京都台東区台東二丁目9番4号
株式会社筑波銀行東京支店

【電話番号】 (03)3835局6031(代表)

【事務連絡者氏名】 東京支店長 古河 利弘

【縦覧に供する場所】 株式会社筑波銀行東京支店
(東京都台東区台東二丁目9番4号)

株式会社筑波銀行松戸支店
(千葉県松戸市北松戸二丁目1番4号)

株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
		(自2014年 4月1日 至2015年 3月31日)	(自2015年 4月1日 至2016年 3月31日)	(自2016年 4月1日 至2017年 3月31日)	(自2017年 4月1日 至2018年 3月31日)	(自2018年 4月1日 至2019年 3月31日)
連結経常収益	百万円	44,166	44,730	41,186	40,606	38,119
連結経常利益	百万円	6,906	8,521	5,713	4,933	1,995
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	5,972	6,464	3,701	3,037	1,083
連結包括利益	百万円	13,095	173	1,231	4,223	1,446
連結純資産額	百万円	110,228	109,545	105,677	109,449	110,460
連結総資産額	百万円	2,302,093	2,317,086	2,376,801	2,420,184	2,401,627
1株当たり純資産額	円	884.45	876.20	855.83	901.77	914.31
1株当たり当期純利益	円	71.20	77.16	44.38	36.54	13.13
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	円	33.39	37.68	18.88	16.63	4.98
自己資本比率	%	4.78	4.72	4.44	4.52	4.59
連結自己資本利益率	%	5.73	5.88	3.44	2.82	0.98
連結株価収益率	倍	5.46	3.90	7.02	9.57	14.69
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	4,675	6,237	5,925	86,159	39,540
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	40,376	6,907	12,267	10,319	102,216
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	8,167	1,610	2,637	452	434
現金及び現金同等物 の期末残高	百万円	76,288	75,347	79,050	154,438	216,679
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	1,743 [1,026]	1,690 [1,021]	1,675 [1,042]	1,660 [1,033]	1,607 [993]

(注) 1. 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2. 自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部の合計で除して算出しております。

(2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第91期	第92期	第93期	第94期	第95期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
経常収益	百万円	43,527	44,119	40,685	40,092	37,586
経常利益	百万円	6,396	7,887	5,308	4,443	1,776
当期純利益	百万円	5,523	5,959	3,407	2,743	936
資本金	百万円	48,868	48,868	48,868	48,868	48,868
発行済株式総数	千株					
(普通株式)		82,553	82,553	82,553	82,553	82,553
(第二種優先株式)		709	709			
(第四種優先株式)		70,000	70,000	70,000	70,000	70,000
純資産額	百万円	106,857	107,412	102,666	105,689	106,701
総資産額	百万円	2,304,338	2,318,480	2,378,950	2,421,863	2,403,672
預金残高	百万円	2,162,464	2,180,502	2,245,712	2,286,223	2,256,981
貸出金残高	百万円	1,566,983	1,602,818	1,669,067	1,632,853	1,646,313
有価証券残高	百万円	614,163	597,718	576,463	571,248	475,116
1株当たり純資産額	円	843.60	850.35	819.36	856.22	868.76
1株当たり配当額	円					
(普通株式)		5.00	5.00	5.00	5.00	5.00
(第二種優先株式)		60.00	60.00			
(第四種優先株式)		0.75	0.75	0.55	0.30	0.00
(内1株当たり中間配当額)	(円)	()	()	()	()	()
(普通株式)		()	()	()	()	()
(第二種優先株式)		()	()	()	()	()
(第四種優先株式)		()	()	()	()	()
1株当たり当期純利益	円	65.76	71.05	40.81	32.98	11.34
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円	30.88	34.74	17.38	15.02	4.30
自己資本比率	%	4.63	4.63	4.31	4.36	4.43
自己資本利益率	%	5.43	5.56	3.24	2.63	0.88
株価収益率	倍	5.91	4.23	7.64	10.61	17.01
配当性向	%	7.60	7.03	12.25	15.16	44.08
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	1,667 [972]	1,612 [966]	1,596 [985]	1,576 [969]	1,524 [933]
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX)	%	98.99 (130.68)	78.14 (116.54)	82.16 (133.67)	92.96 (154.88)	54.77 (147.07)
最高株価	円	430	476	367	434	394
最低株価	円	325	264	254	303	185

- (注) 1. 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2. 自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部の合計で除して算出しております。
3. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

2 【沿革】

1921年11月	茨城無尽(株)設立 本店を水戸市に置く
1927年4月	下妻無尽(株)設立 本店を下妻市に置く
1952年5月	下妻無尽(株) 相互銀行へ転換、商号を(株)東陽相互銀行に変更 茨城無尽(株) 相互銀行へ転換、商号を(株)茨城相互銀行に変更
1952年9月	(株)関東銀行設立 本店を土浦市に置く(同年10月開業)
1974年4月	(株)関東銀行、株式を東京証券取引所市場第二部に上場(1977年3月第一部に指定)
1975年4月	(株)関東銀行、外国為替業務開始
1977年1月	(株)関東銀行、総合オンライン稼働
1983年5月	(株)関東銀行、国債等公共債窓口販売業務開始
1983年7月	(株)関東銀行、関銀ビジネスサービス(株)(2010年3月、筑波ビジネスサービス(株)に商号変更)設立 (現・連結子会社)
1984年1月	(株)関東銀行、関東信用保証(株)(2010年3月、筑波信用保証(株)に商号変更)設立(現・連結子会社)
1984年9月	(株)茨城相互銀行、(株)茨銀ビジネスサービス設立
1987年12月	(株)関東銀行、第3次オンライン稼働
1989年2月	(株)東陽相互銀行 普通銀行へ転換、商号を(株)つくば銀行に変更 (株)茨城相互銀行 普通銀行へ転換、商号を(株)茨城銀行に変更
1989年7月	(株)関東銀行、関銀コンピュータサービス(株)(2013年4月、筑波総研(株)に商号変更)設立(現・連結子会社) (株)茨城銀行、いばぎん信用保証(株)設立
1991年2月	(株)関東銀行、海外コルレス業務取扱認可
1991年9月	(株)茨城銀行、(株)いばぎんミリオンカード(2002年1月、(株)いばぎんカードに商号変更)設立
1993年8月	(株)関東銀行、かんぎん不動産調査(株)設立
1993年11月	(株)関東銀行、信託代理店業務取扱開始
1996年11月	(株)つくば銀行、(株)つくば保証サービス設立
1998年7月	(株)関東銀行、関銀オフィスサービス(株)設立
1998年12月	(株)関東銀行、投資信託窓口販売業務取扱開始
2000年5月	(株)関東銀行、新オンラインシステム稼働
2001年4月	(株)関東銀行、保険商品窓口販売業務取扱開始
2001年10月	(株)関東銀行・(株)つくば銀行・(株)茨城銀行 三行による「包括的業務提携」の合意
2002年10月	(株)関東銀行、生命保険商品窓口販売業務取扱開始
2003年4月	(株)関東銀行と(株)つくば銀行が合併、商号を(株)関東つくば銀行に変更(資本金200億円) 関東信用保証(株)、(株)つくば保証サービスを吸収合併
2005年10月	(株)関東つくば銀行、証券仲介業務取扱開始
2008年1月	(株)関東つくば銀行、じゅうだん会共同版システム稼働
2009年6月	(株)いばぎんカード、(株)茨銀ビジネスサービスを吸収合併
2009年8月	(株)関東つくば銀行グループ、(株)茨城銀行グループ並びに(株)あおぞら銀行グループ三行の戦略的業務提携に関する基本合意
2010年1月	(株)関東つくば銀行、本部機能をつくば市に移転
2010年2月	関銀ビジネスサービス(株)、関銀オフィスサービス(株)を吸収合併 関東信用保証(株)、かんぎん不動産調査(株)を吸収合併
2010年3月	(株)関東つくば銀行と(株)茨城銀行が合併、商号を(株)筑波銀行に変更(資本金313億円)
2010年5月	オンラインシステム統合 (株)あおぞら銀行と戦略的業務提携に基づく預金代理業務の開始
2010年7月	ブランチ・イン・ブランチ(店舗内店舗)形式による店舗統合開始 (2010年度実施店舗数17ヶ店、2011年度実施店舗数7ヶ店、2012年度実施店舗数4ヶ店、2013年度実施店舗数6ヶ店、2014年度実施店舗数3ヶ店、2015年度実施店舗数2ヶ店、2016年度実施店舗数1ヶ店、2017年度実施店舗数4ヶ店、2018年度実施店舗数5ヶ店、合計49ヶ店)
2011年9月	金融機能強化法(震災特例)に基づく第四種優先株350億円発行(資本金488億円)
2011年10月	筑波信用保証(株)、いばぎん信用保証(株)を吸収合併
2015年4月	(株)いばぎんカードの信用保証業務を筑波信用保証(株)へ吸収分割、信用保証業務以外のクレジットカード業務等を(株)筑波銀行が吸収合併
2016年1月	つくば地域活性化ファンド投資事業有限責任組合設立(現・連結子会社)

2019年3月末現在、本支店141、出張所7(ブランチ・イン・ブランチ形式による店舗統合後の営業箇所数99)、連結対象子会社4社

3 【事業の内容】

当行及び当行の関係会社は、当行と連結子会社4社で構成され、銀行業を中心に事務受託業、信用保証業、与信事務受託業、システム受託業、コンサルティング業及び投資業の金融サービスに係る事業を行っております。

当行及び当行の関係会社の事業に係わる位置づけは次のとおりであります。なお、事業の区分は「第5 経理の状況 1(1)連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

(1) 銀行業

当行の本店ほか支店、出張所において、預金業務、貸出業務、内国為替業務、外国為替業務等を行っております。地域重視の営業活動を積極的に展開し、お客さまへの総合的な金融サービスの向上に取り組んでおります。

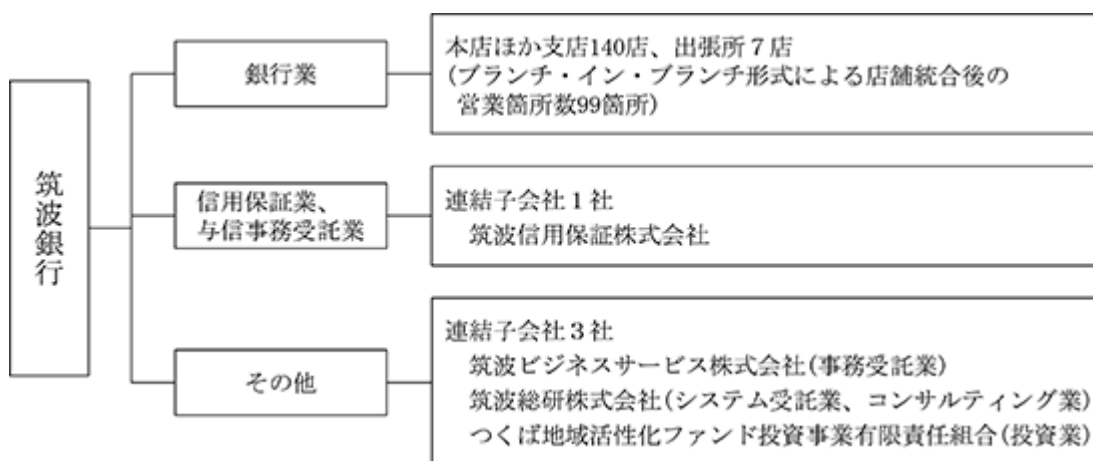
(2) 信用保証業、与信事務受託業

連結子会社において、個人向け貸出の保証業務、担保不動産の調査・評価業務等を行っております。

(3) その他

連結子会社において、現金の整理・精査等の事務受託業、システム受託業、コンサルティング業及び投資業を行っております。

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 又は 出資金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の 所有(又は 被所有) 割合(%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借	業務 提携
(連結子会社) 筑波ビジネス サービス株式会社	茨城県 つくば市	20	その他 (事務受託業)	100.00	3 (1)		預金取引 業務委託取引	建物賃借	
(連結子会社) 筑波信用保証 株式会社	茨城県 土浦市	91	信用保証業、 与信事務受託業	100.00	3 (1)		預金取引 業務委託取引 保証取引	土地建物 賃借	
(連結子会社) 筑波総研株式会社	茨城県 土浦市	50	その他 (システム受託業、 コンサルティング 業)	100.00	3 (1)		預金取引 業務委託取引	土地建物 賃借	
(連結子会社) つくば地域活性化 ファンド投資事業 有限責任組合	茨城県 土浦市	341	その他 (投資業)	100.00 (1.00)	()		預金取引		

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。
2. 上記関係会社のうち、有価証券報告書又は有価証券届出書を提出している会社はありません。
3. 「議決権の所有(又は被所有)割合」欄の()内は子会社による間接所有の割合(内書き)であります。なお、投資事業有限責任組合につきましては出資比率を記載しております。
4. 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の()内は、当行の役員(内書き)であります。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社における従業員数

2019年3月31日現在

セグメントの名称	銀行業	信用保証業、 与信事務受託業	その他	合計
従業員数(人)	1,524 [933]	21 [25]	62 [35]	1,607 [993]

- (注) 1. 従業員数は、執行役員17人と嘱託及び臨時従業員949人を含んでおりません。
2. 臨時従業員数は、[]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。

(2) 当行の従業員数

2019年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
1,524 [933]	41.2	18.7	5,700

- (注) 1. 従業員数は、執行役員15人、出向者45人、嘱託及び臨時従業員892人を含んでおりません。
2. 当行の従業員はすべて銀行業のセグメントに属しております。
3. 臨時従業員数は、[]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
4. 平均年齢、平均勤続年数及び平均年間給与は、出向者45人分を含めております。
5. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
6. 当行の従業員組合は、筑波銀行従業員組合と称し、組合員数は1,117人です。労使間においては特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において当行及び連結子会社（以下「当行グループ」という。）が判断したものであります。

(1) 経営方針

経営の基本方針

当行は、「地域の皆さまの信頼をもとに、存在感のある銀行を目指し、豊かな社会づくりに貢献します。」を基本理念に掲げ、永年築き上げてきたノウハウや人材、ポテンシャルの高い営業基盤等を最大限に活用し、質の高い金融サービスをお客さまに提供することにより、これまで以上にお客さまから支持される地域金融機関を目指すとともに、収益力の強化と健全な財務基盤の確立を図ることで、企業価値の拡大につなげ、株主価値の向上を目指してまいります。

また、従業員が持てる力を遺憾なく発揮し、働きがいがあり、公正に処遇される自由闊達な組織を目指すとともに、金融機関としての社会的責任を自覚し、地域経済活性化・地方創生のために惜しみない貢献を行ってまいります。

目標とする経営指標

当行は2019年4月より第4次中期経営計画『「Rising Innovation 2022」～選択と集中～』をスタートさせました。中期経営計画の期間は2019年度から2021年度までの3年間で、最終年度の計数目標（単体ベース）は以下のとおりであります。

経営指標	目標(2022年3月末時点)
コア業務純益	30億円以上
当期純利益	25億円以上
自己資本比率	8%台
ROE	2.4%以上
コアOHR	5%改善

(2) 経営環境及び対処すべき課題

2018年度の国内経済は、雇用・所得情勢が堅調に推移し、輸出・生産活動は持ち直しの動きが続くなど、全体として緩やかな回復基調で推移しましたが、2019年の年明けから、中国向けを中心とした輸出の大幅な減少に伴い生産活動が弱含みとなるなど、景気の先行きが懸念されています。

地域金融機関を取り巻く環境は、マイナス金利政策の継続による貸出金・有価証券の運用利回りの低下や、少子高齢化・人口減少に伴う市場規模の縮小が懸念されるなか、引続き厳しい経営環境が見込まれます。

このような環境下、当行は地域を支える金融機関として、事業性評価を踏まえた本業支援などお取引先企業の経営課題の解決に積極的に貢献することにより、将来にわたって十分な金融仲介機能を発揮し、地域経済の発展と活性化にこれまで以上に取り組んでまいります。また、お客さまの安定的な資産形成の実現に向けて、「お客さま本位の業務運営」を定着させる取組みを充実させてまいります。

さらに、2019年度よりスタートしました第4次中期経営計画においては、基本方針として地域のファースト・コール・バンクとして安定的な金融機関の役割を果たすために、本来のリレーションシップバンキングに立ち返った営業を強化する3年間で定め、経営資源の選択と集中により徹底的な体質改善を図ることとしました。基本戦略としては、「サービス品質のイノベーション」、「経営資源のイノベーション」、「営業力のイノベーション」の3点を掲げました。

したがって、2019年度は新中期経営計画の初年度であり、重要な1年になります。これらの新中期経営計画における取組施策を通じて、当行は地域を支える金融機関として、お客さま本位の事業性評価を踏まえ、お客さまの課題解決に向けた取組みや真にお客さまが求めるサービスの提供に努めるとともに、環境・社会・ガバナンス（ESG）やSDGsの課題にも積極的に取組み、当行グループをあげて地域経済の持続的な発展に貢献することで、持続可能なビジネスモデルの構築に努めてまいります。さらに、株主の皆さまとの建設的な対話などを通じ、コーポレート・ガバナンス態勢の一層の強化を図り、企業価値の向上に努めてまいります。

2 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。また、必ずしも事業上のリスクに該当しない事項についても、投資判断上、あるいは当行の事業活動を理解する上で重要と考えられる事項については、投資家に対する情報開示を積極的に行っております。当行は、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、その発生の回避と発生した場合の対応に努めてまいります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において当行グループが判断したものであります。

(1) 信用リスク

不良債権

当行が保有する貸出債権には不良債権も含まれております。

これらの貸出債権については、貸出先の経営状態の悪化や担保価値の下落等により、不良債権及び信用コスト（不良債権の引当・償却）が増加する場合があります、その結果、業績や財務内容に影響を及ぼす可能性があります。

貸倒引当金

当行は、自己査定を行い、その査定結果に基づいて貸倒引当金を計上しております。実際の貸倒れによる損失が貸倒引当金計上時点の査定結果と乖離し、貸倒引当金の額を超える場合があります、貸倒引当金が不十分となる可能性があります。また、担保価値の下落及びその他予期せぬ理由により、貸倒引当金の積み増しを必要とする場合もあります。

権利行使

当行は、担保価値の下落や不動産市場における流動性の欠如、有価証券の価格の下落等の事情により、担保権を設定した不動産や有価証券の換金、または貸出先の保有するこれらの資産に対する強制執行ができない場合があります。

(2) 市場リスク

価格変動リスク

当行は、市場性のある株式、債券等を保有しております。これら有価証券の価格下落により損失が発生し、当行の業績等に影響を及ぼす可能性があります。

金利リスク

資産と負債の金利または更改期間が異なることから、金利の変動によって利益が減少ないし損失が発生し、当行の業績等に影響を及ぼす可能性があります。

為替リスク

外貨建資産・負債について、為替の価格変動により当行の業績等に影響を及ぼす可能性があります。

市場信用リスク

社債、クレジット・デリバティブ等について、信用スプレッドが変動することによって、現在価値および期間損益に影響を与え、当行の業績等に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 流動性リスク

当行の財務内容の悪化や市場の風評等により必要な資金の確保ができなくなり、資金繰りが悪化する場合や、資金の確保に通常よりも著しく不利な条件での資金調達を余儀なくされる可能性があります。

(4) オペレーショナル・リスク

事務リスク

当行の役職員が正確な事務を怠り、または事故を起こし、もしくは不正をはたらくことにより、当行が損失を被る可能性があります。

システムリスク

当行が利用しているコンピューターシステムの停止または誤作動等、システムの不備等の事態が発生した場合、業務が遂行できない可能性があります。

(5) 財務上のリスク

繰延税金資産

当行では、繰延税金資産を5年間の長期収益計画に基づいて計上しております。この繰延税金資産の計算は、将来の課税所得に関する様々な予測・仮定に基づいており、実際の結果がかかる予測・仮定とは異なる可能性があります。当行が、将来の課税所得の予測・仮定に基づいて繰延税金資産の一部または全部の回収ができないと判断した場合、繰延税金資産を減額することとなり、その結果、当行の業績に影響を与えるとともに、自己資本比率の低下を招くことがあります。

退職給付債務

当行の退職給付費用及び債務は、割引率等の数理計算上で設定される前提条件や年金資産の長期期待運用収益率に基づいて算出されております。実際の結果が前提条件と異なる場合、または前提条件が変更された場合、その影響額は累積され、将来にわたって定期的に認識されるため、一般的には将来期間において認識される費用及び計上される債務に影響を及ぼします。今後の割引率や運用利回りの変動によっては、当行の業績と財務内容に影響を及ぼす可能性があります。

自己資本比率

自己資本比率は、法令等に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。当行は、国内基準を適用しており、自己資本比率を4%以上に維持することを求められております。

当行の自己資本比率が4%を下回った場合には、業務の全部または一部の停止命令を含む早期是正措置等が発動されることとなります。

(6) 格付低下のリスク

当行は外部格付機関より格付を取得しておりますが、外部格付機関が格付を引き下げた場合、当行の資金調達等

に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 法令等の違反に係るリスク

法令等違反により訴訟の提起や行政処分を被った場合、当行の業績等に影響を及ぼす可能性があります。

(8) その他のリスク

法律や規制の改正

将来における法律、規則、政策、実務慣行、解釈、財政及びその他の政策の変更により、当行の業務遂行や業績等に影響を及ぼす可能性があります。

自然災害等

当行の主要な事業拠点やシステム拠点がある地域において、大規模な震災等が発生した場合、事業活動に支障が生じ、業績や財務内容に影響を及ぼす可能性があります。

風評リスク

当行に関して事実に基づかない風評等により、預金の流出等が発生した場合、資金調達コストの増加により当行の業績等に影響を及ぼす可能性があります。

感染症の流行

新型インフルエンザ等感染症の流行により、事業活動に支障が生じ、当行の業績等に影響を及ぼす可能性があります。

情報漏洩

当行は、業務上、多数の顧客情報を保有しており、法令等に則り内部規程を定め情報管理の徹底を図っております。こうした情報が万一漏洩した場合には、当行の業務運営や業績に影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当行グループの財政状態、経営成績およびキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

財政状態及び経営成績の状況

（財政状態）

総資産は、現金預け金は増加しましたが、有価証券の減少等により前連結会計年度末比185億56百万円減少し、2兆4,016億27百万円となりました。

負債は、預金の減少等により前連結会計年度末比195億67百万円減少し、2兆2,911億67百万円となりました。

純資産は、親会社株主に帰属する当期純利益の計上等により前連結会計年度末比10億11百万円増加し、1,104億60百万円となりました。

主要な勘定残高では、預金は、法人預金の減少等により前連結会計年度末比291億18百万円減少し、2兆2,458億86百万円となりました。

貸出金は、住宅ローン等の個人向け貸出や地方公共団体向け貸出の増加等により前連結会計年度末比134億61百万円増加し、1兆6,467億79百万円となりました。

有価証券は、国内債券、外国証券および投資信託の減少等により前連結会計年度末比961億30百万円減少し、4,736億3百万円となりました。

（経営成績）

経常収益は、有価証券利息配当金が増加した一方、貸出金利の低下に伴う貸出金利息の減少やその他業務収益の減少等により前連結会計年度比24億87百万円減少し、381億19百万円となりました。

経常費用は、預金利息や物件費などの営業経費は減少しましたが、その他業務費用の増加等により前連結会計年度比4億50百万円増加し、361億23百万円となりました。

以上の結果、経常利益は、前連結会計年度比29億38百万円減少の19億95百万円となり、親会社株主に帰属する当期純利益についても、同19億53百万円減少の10億83百万円となりました。

セグメントごとの経営成績は次のとおりです。

「銀行業」における外部顧客に対する経常収益は、前連結会計年度比24億85百万円減少し375億51百万円、セグメント利益は同26億63百万円減少し17億96百万円となりました。資金運用収益は前連結会計年度比5億44百万円減少し269億40百万円、資金調達費用は同9百万円増加し9億21百万円となりました。

「信用保証業、与信事務受託業」における外部顧客に対する経常収益は、前連結会計年度比20百万円減少し4億34百万円、セグメント利益は同2億64百万円減少し3億5百万円となりました。

また、「銀行業」のセグメント資産は、前連結会計年度末比181億91百万円減少し2兆4,036億72百万円、セグメント負債は同192億3百万円減少し2兆2,969億71百万円となりました。

「信用保証業、与信事務受託業」のセグメント資産は、前連結会計年度末比1億18百万円減少し121億69百万円となり、セグメント負債は同3億58百万円減少し78億2百万円となりました。

キャッシュ・フローの状況

営業活動によるキャッシュ・フローは、預金の減少等により前連結会計年度比1,257億円減少し、395億40百万円の減少となりました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、有価証券の取得による支出の減少や有価証券の売却による収入の増加

等により前連結会計年度比1,125億36百万円増加し、1,022億16百万円の増加となりました。

財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払額の減少等により前連結会計年度比17百万円増加したものの、4億34百万円の減少となりました。

以上の結果、当連結会計年度末における現金及び現金同等物の期末残高は、前連結会計年度末比622億41百万円増加し、2,166億79百万円となりました。

生産、受注及び販売の実績

「生産、受注及び販売の実績」は、銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当行グループの経営成績等の状況に関する分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において判断したものであります。

経営者の視点による認識及び分析・検討内容

地域金融機関を取り巻く経営環境は、低金利環境の長期化や金融機関間の競争激化の影響等により、預貸金利鞘の縮小が資金利益の下押し要因となるなど、これまで以上に厳しさを増しています。

当行グループの主要な営業基盤である茨城県についても将来的な地域の人口減少及び高齢化の進展が見込まれており、当行グループが今後も地域経済の発展に貢献していくためには、中長期的に持続可能なビジネスモデルを構築し、安定した経営基盤を確立することが不可欠であると認識しております。

当行は、2019年3月末まで『第3次中期経営計画「Rising Innovation 2019 ～進化することへの挑戦～」』を策定し、各種の計数目標（預金残高、貸出金残高、中小企業等貸出金残高、当期純利益（すべて単体ベース））を掲げておりました。計画の最終年度である当事業年度の実績（単体ベース）は以下のとおりとなりました。

項目	計数目標(2019年3月末)	実績(2019年3月末)
預金残高	2兆3,000億円以上	2兆2,569億円
貸出金残高	1兆6,800億円以上	1兆6,463億円
中小企業等貸出金残高	1兆1,700億円以上	1兆2,182億円
当期純利益	35億円以上	9億円

また、当行は2019年4月から2022年3月を計画期間とする第4次中期経営計画『「Rising Innovation 2022」～選択と集中～』をスタートさせました。これに掲げる計数目標の達成に向けて、収益の中核である貸出金利息の減少を事業性評価に基づく取引先の経営支援強化等により抑え、また役務取引等収益の増強等により収益機会を拡大していくとともに、抜本的な営業経費の削減に取り組んでいく方針であります。

なお、第4次中期経営計画の計数目標は「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題」に記載のとおりです。

資本の財源及び流動性

当行グループの中核事業は銀行業であり、主に茨城県を中心とした地域のお客様からお預かりした預金を貸出金や有価証券で運用しております。

資金の流動性については行内に設置したリスク管理委員会で適切に管理しております。

また、重要な資本的支出としては、「第3 設備の状況」に記載のとおりです。

セグメントごとの経営成績等の分析

当行グループは、主たるセグメントである「銀行業」を中心に、グループ一体となってお客様のニーズにお応えできるよう取り組んでまいりました。セグメント別の業績は上記「(1) 経営成績等の状況の概要」に記載のとおりです。

(3) 国内・国際業務部門別収支

当連結会計年度の資金運用収支は260億21百万円、部門別では国内業務部門が241億47百万円、国際業務部門が18億73百万円となりました。役務取引等収支は37億9百万円、部門別では国内業務部門が43億45百万円、国際業務部門が61百万円となりました。その他業務収支は7億48百万円、部門別では国内業務部門が9億86百万円、国際業務部門が17億34百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	24,351	2,224	20	26,555
	当連結会計年度	24,147	1,873		26,021
うち資金運用収益	前連結会計年度	25,221	2,369	20	105 27,466
	当連結会計年度	24,889	2,127	0	75 26,940
うち資金調達費用	前連結会計年度	870	145	0	105 910
	当連結会計年度	741	254	0	75 919
役務取引等収支	前連結会計年度	4,775	59	628	4,087
	当連結会計年度	4,345	61	574	3,709
うち役務取引等収益	前連結会計年度	8,589	25	799	7,815
	当連結会計年度	8,173	21	762	7,432
うち役務取引等費用	前連結会計年度	3,813	85	171	3,727
	当連結会計年度	3,828	83	188	3,723
その他業務収支	前連結会計年度	1,745	1,442		302
	当連結会計年度	986	1,734		748
うちその他業務収益	前連結会計年度	2,166	179		2,345
	当連結会計年度	1,419	218		1,637
うちその他業務費用	前連結会計年度	421	1,621		2,043
	当連結会計年度	432	1,953		2,385

- (注) 1. 「国内業務部門」は当行及び連結子会社の円建取引、「国際業務部門」は当行の外貨建取引であります。ただし、円建外国証券及び円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。
2. 「相殺消去額」は、連結相殺仕訳として消去した金額であります。
3. 資金調達費用は金銭の信託運用見合費用(前連結会計年度1百万円、当連結会計年度0百万円)を控除して表示しております。
4. 資金運用収益及び資金調達費用の合計欄の上段の計数は、「国内業務部門」と「国際業務部門」の間の資金貸借の利息であります。

(4) 国内・国際業務部門別資金運用 / 調達状況

当連結会計年度の資金運用勘定の平均残高は2兆3,131億25百万円、部門別では国内業務部門が2兆3,153億61百万円、国際業務部門が1,154億58百万円となりました。利回りは1.16%、部門別では国内業務部門が1.07%、国際業務部門が1.84%となりました。資金調達勘定の平均残高は2兆2,880億26百万円、部門別では国内業務部門が2兆2,890億5百万円、国際業務部門が1,150億6百万円となりました。利回りは0.04%、部門別では国内業務部門が0.03%、国際業務部門が0.22%となりました。

国内業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	(144,046) 2,353,425	(105) 25,221	1.07
	当連結会計年度	(104,814) 2,315,361	(75) 24,889	1.07
うち貸出金	前連結会計年度	1,632,581	22,196	1.35
	当連結会計年度	1,630,230	21,068	1.29
うち商品有価証券	前連結会計年度	654	2	0.33
	当連結会計年度	445	2	0.48
うち有価証券	前連結会計年度	459,024	2,852	0.62
	当連結会計年度	397,269	3,688	0.92
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	60,203	2	0.00
	当連結会計年度	118,419	22	0.01
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度	52,514	38	0.07
	当連結会計年度	58,264	35	0.06
資金調達勘定	前連結会計年度	2,307,696	870	0.03
	当連結会計年度	2,289,005	741	0.03
うち預金	前連結会計年度	2,285,941	312	0.01
	当連結会計年度	2,271,051	251	0.01
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	4,647	1	0.03
	当連結会計年度	950	0	0.07
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	20,000	491	2.45
	当連結会計年度	20,000	491	2.45
うち借入金	前連結会計年度	0	0	0.29
	当連結会計年度	0	0	0.29

(注) 1. 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、金融業以外の連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。

2. 「国内業務部門」は当行及び連結子会社の円建取引であります。

3. 資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高（前連結会計年度2,896百万円、当連結会計年度2,998百万円）及び利息（前連結会計年度1百万円、当連結会計年度0百万円）を、それぞれ控除して表示しております。

4. ()内は、「国内業務部門」と「国際業務部門」の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

国際業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	149,896	2,369	1.58
	当連結会計年度	115,458	2,127	1.84
うち貸出金	前連結会計年度	2,391	12	0.50
	当連結会計年度	1,097	5	0.49
うち商品有価証券	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち有価証券	前連結会計年度	136,427	2,335	1.71
	当連結会計年度	103,198	2,088	2.02
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	200	3	1.69
	当連結会計年度	560	11	2.13
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
資金調達勘定	前連結会計年度	(144,046) 149,083	(105) 145	0.09
	当連結会計年度	(104,814) 115,006	(75) 254	0.22
うち預金	前連結会計年度	5,004	40	0.81
	当連結会計年度	4,237	23	0.56
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度			
	当連結会計年度	5,908	155	2.63
うち借入金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			

- (注) 1. 平均残高は、日々の残高の平均に基づいて算出しております。
2. 「国際業務部門」とは、当行の外貨建取引であります。
3. ()内は、「国内業務部門」と「国際業務部門」の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺 消去額 ()	合計	小計	相殺 消去額 ()	合計	
資金運用勘定	前連結会計年度	2,359,274	12,490	2,346,784	27,486	20	27,466	1.17
	当連結会計年度	2,326,005	12,880	2,313,125	26,941	0	26,940	1.16
うち貸出金	前連結会計年度	1,634,973		1,634,973	22,208		22,208	1.35
	当連結会計年度	1,631,328		1,631,328	21,074		21,074	1.29
うち商品有価証券	前連結会計年度	654		654	2		2	0.33
	当連結会計年度	445		445	2		2	0.48
うち有価証券	前連結会計年度	595,452	1,575	593,877	5,188	20	5,168	0.87
	当連結会計年度	500,468	1,702	498,766	5,776		5,776	1.15
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	60,403		60,403	0		0	0.00
	当連結会計年度	118,979		118,979	10		10	0.00
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち預け金	前連結会計年度	52,514	10,915	41,599	38	0	37	0.09
	当連結会計年度	58,264	11,177	47,086	35	0	34	0.07
資金調達勘定	前連結会計年度	2,312,733	10,921	2,301,812	911	0	910	0.03
	当連結会計年度	2,299,197	11,170	2,288,026	920	0	919	0.04
うち預金	前連結会計年度	2,290,946	10,921	2,280,025	352	0	352	0.01
	当連結会計年度	2,275,289	11,170	2,264,118	274	0	274	0.01
うち譲渡性預金	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	4,647		4,647	1		1	0.03
	当連結会計年度	950		950	0		0	0.07
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	20,000		20,000	491		491	2.45
	当連結会計年度	25,908		25,908	647		647	2.49
うち借入金	前連結会計年度	0		0	0		0	0.29
	当連結会計年度	0		0	0		0	0.29

- (注) 1. 平均残高欄の「相殺消去額」は、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しており、利息欄の「相殺消去額」は連結相殺仕訳として消去した金額であります。
2. 資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度2,896百万円、当連結会計年度2,998百万円)及び利息(前連結会計年度1百万円、当連結会計年度0百万円)を、それぞれ控除して表示しております。
3. 「国内業務部門」と「国際業務部門」の間の資金貸借の平均残高及び利息は、相殺して記載しております。

(5) 国内・国際業務部門別役務取引の状況

当連結会計年度の役務取引等収益は74億32百万円、部門別では国内業務部門が81億73百万円、国際業務部門が21百万円となりました。役務取引等費用は37億23百万円、部門別では国内業務部門が38億28百万円、国際業務部門が83百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	8,589	25	799	7,815
	当連結会計年度	8,173	21	762	7,432
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	1,707	1	1	1,707
	当連結会計年度	1,956	1	0	1,957
うち為替業務	前連結会計年度	1,438	23	0	1,462
	当連結会計年度	1,417	19	0	1,437
うち証券関連業務	前連結会計年度	133			133
	当連結会計年度	197			197
うち代理業務	前連結会計年度	1,281			1,281
	当連結会計年度	1,644			1,644
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	139			139
	当連結会計年度	143			143
うち保証業務	前連結会計年度	648	0	169	479
	当連結会計年度	680	0	186	493
うちその他業務	前連結会計年度	3,239		628	2,611
	当連結会計年度	2,132		574	1,558
役務取引等費用	前連結会計年度	3,813	85	171	3,727
	当連結会計年度	3,828	83	188	3,723
うち為替業務	前連結会計年度	314	85	0	399
	当連結会計年度	318	82	0	401

(注) 1. 「国内業務部門」は当行及び連結子会社の円建取引、「国際業務部門」は当行の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。

2. 「相殺消去額」は、連結相殺仕訳として消去した金額であります。

(6) 国内・国際業務部門別預金残高の状況
預金の種類別残高(未残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	2,281,416	4,806	11,218	2,275,005
	当連結会計年度	2,253,599	3,381	11,094	2,245,886
うち流動性預金	前連結会計年度	1,254,985		4,918	1,250,067
	当連結会計年度	1,289,754		4,764	1,284,990
うち定期性預金	前連結会計年度	1,021,389		6,300	1,015,089
	当連結会計年度	957,929		6,330	951,599
うちその他	前連結会計年度	5,041	4,806		9,848
	当連結会計年度	5,915	3,381		9,297
譲渡性預金	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
総合計	前連結会計年度	2,281,416	4,806	11,218	2,275,005
	当連結会計年度	2,253,599	3,381	11,094	2,245,886

- (注) 1. 「国内業務部門」は当行及び連結子会社の円建取引、「国際業務部門」は当行の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。
2. 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金
3. 定期性預金 = 定期預金 + 定期積金
4. 「相殺消去額」は、連結相殺仕訳として消去した金額であります。

(7) 貸出金残高の状況
業種別貸出状況(未残・構成比)

業種別	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
国内(除く特別国際金融取引勘定分)	1,633,318	100.00	1,646,779	100.00
製造業	125,269	7.67	126,829	7.70
農業、林業	6,363	0.39	6,495	0.39
漁業	567	0.03	474	0.03
鉱業、採石業、砂利採取業	3,602	0.22	3,795	0.23
建設業	81,189	4.97	85,872	5.21
電気・ガス・熱供給・水道業	13,297	0.81	17,567	1.07
情報通信業	8,841	0.54	8,825	0.54
運輸業、郵便業	54,762	3.35	51,647	3.14
卸売業、小売業	95,841	5.87	96,275	5.85
金融業、保険業	92,168	5.64	87,448	5.31
不動産業、物品賃貸業	248,779	15.23	243,578	14.79
学術研究、専門・技術サービス業	11,235	0.69	11,719	0.71
宿泊業	4,066	0.25	3,651	0.22
飲食業	14,048	0.86	14,232	0.86
生活関連サービス業、娯楽業	19,251	1.18	18,167	1.10
教育、学習支援業	9,307	0.57	10,056	0.61
医療・福祉	71,909	4.40	72,111	4.38
その他のサービス業	24,022	1.47	25,188	1.53
地方公共団体	252,359	15.46	257,162	15.62
その他	496,443	30.40	505,688	30.71
特別国際金融取引勘定分				
政府等				
金融機関				
その他				
合計	1,633,318		1,646,779	

(注) 「国内」とは、当行及び連結子会社であります。

(8) 国内・国際業務部門別有価証券の状況
有価証券残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	前連結会計年度	107,030			107,030
	当連結会計年度	81,156			81,156
地方債	前連結会計年度	99,761			99,761
	当連結会計年度	117,143			117,143
社債	前連結会計年度	100,292			100,292
	当連結会計年度	82,030			82,030
株式	前連結会計年度	10,914		1,454	9,460
	当連結会計年度	7,012		1,484	5,528
その他の証券	前連結会計年度	116,972	136,373	155	253,189
	当連結会計年度	97,918	90,114	288	187,744
合計	前連結会計年度	434,971	136,373	1,610	569,734
	当連結会計年度	385,261	90,114	1,773	473,603

- (注) 1. 「国内業務部門」は当行及び連結子会社の円建取引、「国際業務部門」は当行の外貨建取引であります。ただし、円建外国証券は「国際業務部門」に含めております。
2. 「その他の証券」には、外国債券を含んでおります。
3. 「相殺消去額」は、連結会社相互間の取引その他連結上の調整であります。

(自己資本比率等の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(2006年金融庁告示第19号)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を採用しております。

連結自己資本比率(国内基準)

(単位:億円、%)

	2019年3月31日
1. 連結自己資本比率(2/3)	8.72
2. 連結における自己資本の額	1,076
3. リスク・アセットの額	12,333
4. 連結総所要自己資本額	493

単体自己資本比率(国内基準)

(単位:億円、%)

	2019年3月31日
1. 単体自己資本比率(2/3)	8.42
2. 単体における自己資本の額	1,038
3. リスク・アセットの額	12,323
4. 単体総所要自己資本額	492

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(1998年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(1948年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1. 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2. 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3. 要管理債権

要管理債権とは、3ヵ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4. 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定額

債権の区分	2018年3月31日	2019年3月31日
	金額(億円)	金額(億円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	62	59
危険債権	284	315
要管理債権	55	76
正常債権	16,116	16,259

4 【経営上の重要な契約等】

該当ありません。

5 【研究開発活動】

該当ありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当行及び連結子会社では、営業の効率化及び顧客の利便性向上をはかるべく、店舗の新設のほか、既存店舗等の改修や事務機器の増設を行ってまいりました。その結果、当連結会計年度における設備投資の額は、銀行業で3,743百万円となりました。

セグメントごとの設備投資については、次のとおりであります。

当連結会計年度に重要な異動があった主要な設備の状況は次のとおりであります。

銀行業 移転

会社名	店舗名	所在地	設備の内容	投資金額 (百万円)	完了年月
当行	守谷支店 守谷南支店	茨城県守谷市	店舗	685	2018年7月
当行	水戸駅南支店	茨城県水戸市	店舗	582	2018年12月
当行	水戸営業部 泉町支店	茨城県水戸市	店舗	627	2019年2月

(注) 投資金額には、消費税等を含んでおりません。

ブランチ・イン・ブランチ形式での移転

会社名	店舗名	旧所在地	設備の内容	敷地面積 (㎡)	建物延面積 (㎡)	移転先		移転年月
						店舗名	所在地	
当行	西取手支店	茨城県取手市	店舗	595 (595)	201	新取手支店	茨城県取手市	2018年7月
当行	大工町支店	茨城県水戸市	店舗	855 ()	606	水戸営業部 泉町支店	茨城県水戸市	2019年2月
当行	小山東支店	栃木県小山市	店舗	960 (960)	568	小山支店	栃木県小山市	2019年3月
当行	千代川支店	茨城県下妻市	店舗	1,467 (816)	218	下妻営業部 上妻支店	茨城県下妻市	2019年3月

(注) 敷地面積欄の()内は、借地の面積(うち書き)であります。

2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。

(2019年3月31日現在)

	会社名	店舗名 その他	所在地	セグメント の名称	設備の 内容	土地		建物	動産	リース 資産	合計	従業員 数(人)
						面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)					
当行		本店 他132店	茨城県	銀行業	店舗	149,058 (58,413)	8,050	10,019	1,203		19,273	1,363
		宇都宮支店 他6店	栃木県	銀行業	店舗	4,784 (2,429)	266	47	16		330	44
		松戸支店 他5店	千葉県	銀行業	店舗	4,965 (2,067)	481	429	56		967	30
		東京支店 他1店	東京都	銀行業	店舗	500 (12)	213	6	8		229	17
		事務センター (2カ所)	茨城県 土浦市他	銀行業	事務 センター	16,843 (11,678)	340	390	193		923	70
		寮・社宅 (13カ所)	茨城県 土浦市他	銀行業	厚生施設	29,895 (2,223)	649	736	5		1,391	
		運動場	茨城県 那珂市	銀行業	厚生施設	19,101 (6,367)	44	22	0		67	
		その他	茨城県 水戸市他	銀行業	その他	13,692 (1,081)	457	91	29		578	
		小計				238,842 (84,273)	10,503	11,744	1,514		23,762	1,524
連結 子会 社	筑波ビジネス サービス(株)	本社	茨城県 つくば市	その他	事務所	()			0		0	2
	筑波信用保証 (株)	本社	茨城県 土浦市	信用保証業 、与信事務 受託業	事務所	137 (137)			2		2	21
	筑波総研(株)	本社	茨城県 土浦市	その他	事務所	100 (100)			0		0	60
	小計					237 (237)			3		3	83
	合計				239,079 (84,510)	10,503	11,744	1,518		23,765	1,607	

- (注) 1. 当行の主要な設備の太宗は、店舗、事務センターであるため、銀行業に一括計上しております。
2. 土地の面積欄の()内は、借地の面積(うち書き)であり、その年間賃借料は建物も含め547百万円でありま
す。
3. 動産は、事務機械731百万円、その他786百万円であります。
4. 店舗外現金自動設備101カ所は上記に含めて記載しております。
5. 上記の他、ソフトウェアは2,224百万円であります。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度末において計画中である重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

銀行業
新設

会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	投資予定金額(百万円)		資金調達方法	完了予定年月
				総額	既支払額		
当行	次期営業店端末	茨城県 土浦市他	ソフト ウェア等	2,658	1,195	自己資金	2019年12月

(注) 投資予定金額には、消費税等を含んでおりません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	333,000,000
第三種優先株式	10,000,000
第四種優先株式	100,000,000
計	333,000,000

(注) 計の欄には、定款に規定されている発行可能株式総数を記載しております。

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年6月25日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	82,553,721	82,553,721	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数は100株 であります。 (注2、5)
第四種優先株式 (注)1	70,000,000	70,000,000		単元株式数は100株 であります。 (注3、4、5)
計	152,553,721	152,553,721		

(注)1. 第四種優先株式は、企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第8項に基づく「行使価額修正条項付新株予約権付社債券等」であります。

(注)2. 普通株式は、議決権を有し、権利内容に何ら限定のない当行における標準となる株式です。

(注)3. 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の特質等

行使価額修正条項付新株予約権付社債券等である第四種優先株式の特質については、当行の普通株式の株価を基準として取得価額が修正され、取得と引換えに交付する普通株式数が増減します。また、その修正基準、修正頻度および行使価額の下限等については、以下(注)4.に記載のとおりです。

なお、当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に表示された権利の行使に関する事項、および株券の売買に関する事項についての当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の所有者との取決めはありません。

(注)4. 第四種優先株式の内容は次のとおりです。

1. 優先期末配当金

当行は、定款第47条に定める期末配当金を支払うときは、当該期末配当に係る基準日の最終の株主名簿に記載または記録された第四種優先株式を有する株主(以下「第四種優先株主」という。)または第四種優先株式の登録株式質権者(以下「第四種優先登録株式質権者」という。)に対し、普通株式を有する株主(以下「普通株主」という。)および普通株式の登録株式質権者(以下「普通登録株式質権者」という。)に先立ち、第四種優先株式1株につき、第四種優先株式1株当たりの払込金額相当額(ただし、第四種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合またはこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。)に、下記2に定める配当率(以下「第四種優先配当率」という。)を乗じて算出した額の金銭(円位未満小数第3位まで算出し、その小数第3位を切り上げる。)の期末配当金(以下「第四種優先期末配当金」という。)を支払う。ただし、当該事業年度において第5項に定める第四種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額とする。

2. 優先配当率

2012年4月1日に開始する事業年度以降の各事業年度に係る第四種優先配当率

第四種優先配当率 = 預金保険機構が当該事業年度において公表する優先配当率としての資金調達コスト(ただし、預金保険機構が当該事業年度において優先配当率としての資金調達コストを公表しない場合には、直前事業年度までに公表した優先配当率としての資金調達コストのうち直近のもの)

上記の算式において「優先配当率としての資金調達コスト」とは、預金保険機構が、原則、毎年7月頃を目途に公表する直前事業年度に係る震災特例金融機関等の優先配当率としての資金調達コストをいう。

ただし、優先配当率としての資金調達コストが日本円TIBOR(12ヶ月物)または8%のうちいずれか低い方(以下「第四種優先株式上限配当率」という。)を超える場合には、第四種優先配当率は第四種優先株式上限配当率とする。

上記の但書において「日本円TIBOR（12ヶ月物）」とは、毎年4月1日（同日が銀行休業日の場合は直後の銀行営業日）の午前11時における日本円12ヶ月物トーキョー・インター・バンク・オフアード・レート（日本円TIBOR）として全国銀行協会によって公表される数値またはこれに準ずるものと認められるもの（%未満小数第4位まで算出し、その小数第4位を四捨五入する。）を指すものとする。日本円TIBOR（12ヶ月物）が公表されていない場合は、4月1日（同日がロンドンの銀行休業日の場合は直後の銀行営業日）において、ロンドン時間午前11時現在のReuters3750ページに表示されるロンドン・インター・バンク・オフアード・レート（ユーロ円LIBOR12ヶ月物（360日ベース））として、英国銀行協会（BBA）によって公表される数値（%未満小数第4位まで算出し、その小数第4位を四捨五入する。）を、日本円TIBOR（12ヶ月物）に代えて用いるものとする。

3. 非累積条項

ある事業年度において第四種優先株主または第四種優先登録株式質権者に対して支払う期末配当金の額が第四種優先期末配当金の額に達しないときは、その不足額は翌事業年度以降に累積しない。

4. 非参加条項

第四種優先株主または第四種優先登録株式質権者に対しては、第四種優先期末配当金の額を超えて配当は行わない。ただし、当行が行う吸収分割手続の中で行われる会社法第758条第8号口もしくは同法第760条第7号口に規定される剰余金の配当または当行が行う新設分割手続の中で行われる同法第763条第12号口もしくは第765条第1項第8号口に規定される剰余金の配当についてはこの限りではない。

5. 第四種優先中間配当金

当行は、定款第48条に定める中間配当を行うときは、当該中間配当に係る基準日の最終の株主名簿に記載または記録された第四種優先株主または第四種優先登録株式質権者に対し、普通株主および普通登録株式質権者に先立ち、第四種優先株式1株につき、第四種優先期末配当金の額の2分の1を上限とする金銭（以下「第四種優先中間配当金」という。）を支払う。

6. 残余財産

(1) 残余財産の分配

当行は、残余財産を分配するときは、第四種優先株主または第四種優先登録株式質権者に対し、普通株主および普通登録株式質権者に先立ち、第四種優先株式1株につき、第四種優先株式1株当たりの払込金額相当額（ただし、第四種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合またはこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。）に下記(3)に定める経過第四種優先期末配当金相当額を加えた額の金銭を支払う。

(2) 非参加事項

第四種優先株主または第四種優先登録株式質権者に対しては、上記(1)のほか、残余財産の分配は行わない。

(3) 経過第四種優先期末配当金相当額

第四種優先株式1株当たりの経過第四種優先期末配当金相当額は、残余財産の分配が行われる日（以下「分配日」という。）において、分配日の属する事業年度の初日（同日を含む。）から分配日（同日を含む。）までの日数に第四種優先期末配当金の額を乗じた金額を365で除して得られる額（円位未満小数第3位まで算出し、その小数第3位を切り上げる。）をいう。ただし、上記の第四種優先期末配当金は、分配日の前日時点において公表されている直近の優先配当率としての資金調達コストを用いて算出する。また、分配日の属する事業年度において第四種優先株主または第四種優先登録株式質権者に対して第四種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額とする。

7. 議決権

第四種優先株主は、全ての事項について株主総会において議決権を有しない。ただし、第四種優先株主は、()各事業年度終了後、当該事業年度に係る定時株主総会の招集のための取締役会決議までに開催される全ての取締役会において、第四種優先期末配当金の額全部（第四種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額）の支払を行なう旨の決議がなされず、かつ、(a)当該事業年度に係る定時株主総会に第四種優先期末配当金の額全部（第四種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額）の支払を受ける旨の議案が提出されないときは、その定時株主総会より、または、(b)第四種優先期末配当金の額全部（第四種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額）の支払いを受ける旨の議案がその定時株主総会において否決されたときは、その定時株主総会終結の時より、()第四種優先期末配当金の額全部（第四種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額）の支払いを受ける旨の取締役会決議または株主総会決議がなされる時までの間は、全ての事項について株主総会において議決権を行使することができる。

8. 普通株式を対価とする取得請求権

(1) 取得請求権

第四種優先株主は、下記(2)に定める取得を請求することができる期間中、当行に対して自己の有する第四種優先株式を取得することを請求することができる。かかる取得の請求があった場合、当行は第四種優先株主がかかる取得の請求をした第四種優先株式を取得すると引換えに、下記(3)に定める財産を当該第四種優先株主に対して交付するものとする。

(2) 取得を請求することができる期間

2012年7月1日から2031年9月30日まで（以下「取得請求期間」という。）とする。

(3) 取得と引換えに交付すべき財産

当行は、第四種優先株式の取得と引換えに、第四種優先株主が取得の請求をした第四種優先株式数に第四種優先株式1株当たりの払込金額相当額（ただし、第四種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合またはこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。）を乗じた額を下

記(4)ないし(8)に定める取得価額で除した数の普通株式を交付する。なお、第四種優先株式の取得と引換えに交付すべき普通株式の数に1株に満たない端数があるときは、会社法第167条第3項に従ってこれを取扱う。

(4)当初取得価額

取得価額は、当初、取得請求期間の初日に先立つ5連続取引日（取得請求期間の初日を含まず、株式会社東京証券取引所（当行の普通株式が複数の金融商品取引所に上場されている場合、取得請求期間の初日に先立つ1年間における出来高が最多の金融商品取引所）における当行の普通株式の終値（気配表示を含む。以下「終値」という。）が算出されない日を除く。）の毎日の終値の平均値に相当する金額（円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。）とする。ただし、かかる計算の結果、取得価額が下記(7)に定める下限取得価額を下回る場合は、下限取得価額とする。

(5)取得価額の修正

取得請求期間において、毎月第3金曜日（以下「決定日」という。）の翌日以降、取得価額は、決定日まで（当日を含む。）の直近の5連続取引日（ただし、終値のない日は除き、決定日が取引日ではない場合は、決定日の直前の取引日までの5連続取引日とする。）の終値の平均値に相当する金額（円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。）に修正される。ただし、かかる計算の結果、修正後取得価額が下記(7)に定める下限取得価額を下回る場合は、修正後取得価額は下限取得価額とする。なお、上記5連続取引日の初日以降決定日まで（当日を含む。）の間に、下記(8)に定める取得価額の調整事由が生じた場合、修正後取得価額は、取締役会が適当と判断する金額に調整される。

(6)上限取得価額

取得価額には上限を設けない。

(7)下限取得価額

下限取得価額は172円とする（ただし、下記(8)による調整を受ける。）。

(8)取得価額の調整

イ．第四種優先株式の発行後、次の各号のいずれかに該当する場合には、取得価額（下限取得価額を含む。）を次に定める算式（以下「取得価額調整式」という。）により調整する（以下、調整後の取得価額を「調整後取得価額」という。）。取得価額調整式の計算については、円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。

$$\text{調整後取得価額} = \text{調整前取得価額} \times \frac{\text{既発行普通株式数} + \frac{\text{交付普通株式数} \times \text{1株当たり払込金額}}{\text{時価}}}{\text{既発行普通株式数} + \text{交付普通株式数}}$$

- ()取得価額調整式に使用する時価（下記ハ.に定義する。以下同じ。）を下回る払込金額をもって普通株式を発行または自己株式である普通株式を処分する場合（無償割当ての場合を含む。）（ただし、当行の普通株式の交付を請求できる取得請求権付株式もしくは新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。以下本(8)において同じ。）その他の証券（以下「取得請求権付株式等」という。）または当行の普通株式の交付と引換えに当行が取得することができる取得条項付株式もしくは取得条項付新株予約権その他の証券（以下「取得条項付株式等」という。）が取得または行使され、これに対して普通株式が交付される場合を除く。）

調整後取得価額は、払込期日（払込期間が定められた場合は当該払込期間の末日とする。以下同じ。）（無償割当ての場合はその効力発生日）の翌日以降、または株主に募集株式の割当てを受ける権利を与えるためもしくは無償割当てのための基準日がある場合はその日の翌日以降、これを適用する。

- ()株式の分割をする場合

調整後取得価額は、株式の分割のための基準日に分割により増加する普通株式数（基準日における当行の自己株式である普通株式に関して増加する普通株式数を除く。）が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、その基準日の翌日以降、これを適用する。

- ()取得価額調整式に使用する時価を下回る価額（下記ニ.に定義する。以下、本()、下記()および()ならびに下記ハ.()において同じ。）をもって当行の普通株式の交付を請求できる取得請求権付株式等を発行する場合（無償割当ての場合を含む。）

調整後取得価額は、当該取得請求権付株式等の払込期日（新株予約権の場合は割当日）（無償割当ての場合はその効力発生日）に、または株主に取得請求権付株式等の割当てを受ける権利を与えるためもしくは無償割当てのための基準日がある場合はその日に、当該取得請求権付株式等の全部が当初の条件で取得または行使されて普通株式が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、その払込期日（新株予約権の場合は割当日）（無償割当ての場合はその効力発生日）の翌日以降、またはその基準日の翌日以降、これを適用する。

上記にかかわらず、上記の普通株式が交付されたものとみなされる日において価額が確定しておらず、後日一定の日（以下「価額決定日」という。）に価額が決定される取得請求権付株式等を発行した場合において、決定された価額が取得価額調整式に使用する時価を下回る場合には、調整後取得価額は、当該価額決定日に残存する取得請求権付株式等の全部が価額決定日に確定した条件で取得または行使されて普通株式が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、当該価額決定日の翌日以降これを適用する。

- ()当行が発行した取得請求権付株式等に、価額がその発行日以降に修正される条件（本イ.また

は口.と類似する希薄化防止のための調整を除く。)が付されている場合で、当該修正が行われる日(以下「修正日」という。)における修正後の価額(以下「修正価額」という。)が取得価額調整式に使用する時価を下回る場合

調整後取得価額は、修正日に、残存する当該取得請求権付株式等の全部が修正価額で取得または行使されて普通株式が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、当該修正日の翌日以降これを適用する。

なお、かかる取得価額調整式の適用に際しては、下記(a)ないし(c)の場合に応じて、調整後取得価額を適用する日の前日において有効な取得価額に、それぞれの場合に定める割合(以下「調整係数」という。)を乗じた額を調整前取得価額とみなすものとする。

- (a)当該取得請求権付株式等について当該修正日の前に上記()または本()による調整が行われていない場合
調整係数は1とする。
- (b)当該取得請求権付株式等について当該修正日の前に上記()または本()による調整が行われている場合であって、当該調整後、当該修正日までの間に、上記(5)による取得価額の修正が行われている場合
調整係数は1とする。
ただし、下限取得価額の算定においては、調整係数は、上記()または本()による直前の調整を行う前の下限取得価額を当該調整後の下限取得価額で除した割合とする。
- (c)当該取得請求権付株式等について当該修正日の前に上記()または本()による調整が行われている場合であって、当該調整後、当該修正日までの間に、上記(5)による取得価額の修正が行われていない場合
調整係数は、上記()または本()による直前の調整を行う前の取得価額を当該調整後の取得価額で除した割合とする。

- ()取得条項付株式等の取得と引換えに取得価額調整式に使用される時価を下回る価額をもって普通株式を交付する場合
調整後取得価額は、取得日の翌日以降これを適用する。

ただし、当該取得条項付株式等について既に上記()または()による取得価額の調整が行われている場合には、調整後取得価額は、当該取得と引換えに普通株式が交付された後の完全希薄化後普通株式数(下記ホ.に定義する。)が、当該取得の直前の既発行普通株式数を超えるときに限り、当該超過する普通株式数が交付されたものとみなして取得価額調整式を適用して算出し、取得の直前の既発行普通株式数を超えないときは、本()による調整は行わない。

- ()株式の併合をする場合
調整後取得価額は、株式の併合の効力発生日以降、併合により減少する普通株式数(効力発生日における当行の自己株式である普通株式に関して減少した普通株式数を除く。)を負の値で表示して交付普通株式数とみなして取得価額調整式を適用して算出し、これを適用する。

ロ.上記イ.(i)ないし(vi)に掲げる場合のほか、合併、会社分割、株式交換または株式移転等により、取得価額(下限取得価額を含む。)の調整を必要とする場合は、取締役会が適当と判断する取得価額(下限取得価額を含む。)に変更される。

- ハ.()取得価額調整式に使用する「時価」は、調整後取得価額を適用する日に先立つ5連続取引日の終値の平均値(終値のない日数を除く。)とする。ただし、平均値の計算は円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。なお、上記5連続取引日の間に、取得価額の調整事由が生じた場合、調整後取得価額は、本(8)に準じて調整する。
- ()取得価額調整式に使用する「調整前取得価額」は、調整後取得価額を適用する日の前日において有効な取得価額とする。
- ()取得価額調整式に使用する「既発行普通株式数」は、基準日がある場合はその日(上記イ.(i)ないし()に基づき当該基準日において交付されたものとみなされる普通株式数は含まない。)の、基準日がない場合は調整後取得価額を適用する日の1ヶ月前の日の、当行の発行済普通株式数(自己株式である普通株式の数を除く。)に当該取得価額の調整の前に上記イ.およびロ.に基づき「交付普通株式数」とみなされた普通株式であって未だ交付されていない普通株式数(ある取得請求権付株式等について上記イ.() (b)または(c)に基づく調整が初めて適用される日(当該日を含む。)からは、当該取得請求権付株式等に係る直近の上記イ.() (b)または(c)に基づく調整に先立って適用された上記イ.() または()に基づく調整により「交付普通株式数」とみなされた普通株式数は含まない。)を加えたものとする。

- ()取得価額調整式に使用する「1株当たりの払込金額」とは、上記イ.(i)の場合には、当該払込金額（無償割当ての場合は0円）（金銭以外の財産による払込の場合には適正な評価額）、上記イ.()および()の場合には0円、上記イ.()ないし()の場合には価額（ただし、()の場合は修正価額）とする。
- ニ．上記イ.()ないし()および上記ハ.()において「価額」とは、取得請求権付株式等または取得条項付株式等の発行に際して払込みがなされた額（新株予約権の場合には、その行使に際して出資される財産の価額を加えた額とする。）から、その取得または行使に際して当該取得請求権付株式等または取得条項付株式等の所持人に交付される普通株式以外の財産の価額を控除した金額を、その取得または行使に際して交付される普通株式の数で除した金額をいう。
- ホ．上記イ.()において「完全希薄化後普通株式数」とは、調整後取得価額を適用する日の既発行普通株式数から、上記ハ.()に従って既発行普通株式数に含まれている未だ交付されていない普通株式数で当該取得条項付株式等に係るものを除いて、当該取得条項付株式等の取得により交付される普通株式数を加えたものとする。
- ヘ．上記イ.()ないし()において、当該各行為に係る基準日が定められ、かつ当該各行為が当該基準日以降に開催される当行の株主総会における一定の事項に関する承認決議を停止条件としている場合には、上記イ.()ないし()の規定にかかわらず、調整後取得価額は、当該承認決議をした株主総会の終結の日の翌日以降にこれを適用する。
- ト．取得価額調整式により算出された上記イ.第2文を適用する前の調整後取得価額と調整前取得価額との差額が1円未満にとどまるときは、取得価額の調整は、これを行わない。ただし、その後取得価額調整式による取得価額の調整を必要とする事由が発生し、取得価額を算出する場合には、取得価額調整式中の調整前取得価額に代えて調整前取得価額からこの差額を差し引いた額（ただし、円位未満小数第2位までを算出し、その小数第2位を切捨てる。）を使用する。

(9)合理的な措置

上記(4)ないし(8)に定める取得価額（第10項(2)に定める一斉取得価額を含む。以下、本(9)において同じ。）は、希薄化防止および異なる種類の株式の株主間の実質的公平の見地から解釈されるものとし、その算定が困難となる場合または算定の結果が不合理となる場合には、当行の取締役会は、取得価額の適切な調整その他の合理的に必要な措置をとるものとする。

(10)取得請求受付場所

東京都中央区八重洲1丁目2番1号
みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部

(11)取得請求の効力発生

取得請求の効力は、取得請求に要する書類が上記(10)に記載する取得請求受付場所に到着した時に発生する。

9. 金銭を対価とする取得条項

(1)金銭を対価とする取得条項

当行は、2021年10月1日以降、取締役会が別に定める日（以下「取得日」という。）が到来したときは、法令上可能な範囲で、第四種優先株式の全部または一部を取得することができる。ただし、取締役会は、当該取締役会の開催日までの30連続取引日（開催日を含む。）の全ての日において終値が下限取得価額を下回っている場合で、かつ、金融庁の事前承認を得ている場合に限り、取得日を定めることができる。この場合、当行は、かかる第四種優先株式を取得するのと引換えに、下記(2)に定める財産を第四種優先株主に対して交付するものとする。なお、第四種優先株式の一部を取得するときは、按分比例の方法による。取得日の決定後も第8項(1)に定める取得請求権の行使は妨げられないものとする。

(2)取得と引換えに交付すべき財産

当行は、第四種優先株式の取得と引換えに、第四種優先株式1株につき、第四種優先株式1株当たりの払込金額相当額（ただし、第四種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合またはこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。）に経過第四種優先期末配当金相当額を加えた額の金銭を交付する。なお、本(2)においては、第6項(3)に定める経過第四種優先期末配当金相当額の計算における「残余財産の分配が行われる日」および「分配日」をいずれも「取得日」と読み替えて、経過第四種優先期末配当金相当額を計算する。

10. 普通株式を対価とする取得条項

(1)普通株式を対価とする取得条項

当行は、取得請求期間の末日までに当行に取得されていない第四種優先株式の全てを、取得請求期間の末日の翌日（以下「一斉取得日」という。）をもって一斉取得する。この場合、当行は、かかる第四種優先株式を取得するのと引換えに、各第四種優先株主に対し、その有する第四種優先株式数に第四種優先株式1株当たりの払込金額相当額（ただし、第四種優先株式につき、株式の分割、株式無償割当て、株式の併合またはこれに類する事由があった場合には、適切に調整される。）を乗じた額を下記(2)に定める普通株式の時価（以下「一斉取得価額」という。）で除した数の普通株式を交付するものとする。第四種優先株式の取得と引換えに交付すべき普通株式の数に1株に満たない端数がある場合には、会社法第234条に従ってこれを取扱う。

(2)一斉取得価額

一斉取得価額は、一斉取得日に先立つ45取引日目に始まる30連続取引日の毎日の終値の平均値（終値が算出されない日を除く。）に相当する金額（円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切捨てる。）とする。ただし、かかる計算の結果、一斉取得価額が下限取得金額を下回る場合は、一斉取得価額は下限取得価額とする。

11. 株式の分割または併合および株式無償割当て

(1)分割または併合

当行は、株式の分割または併合を行うときは、普通株式および第四種優先株式の種類ごとに、同時に同一の割合で行う。

(2)株式無償割当て

当行は、株式無償割当てを行うときは、普通株式および第四種優先株式の種類ごとに、当該種類の株式の無償割当てを、同時に同一の割合で行う。

12. 法令変更等

法令の変更等に伴い本要項の規定について読み替えその他の措置が必要となる場合には、当行の取締役会は合理的に必要な措置を講じる。

13. その他

上記各項は、各種の法令に基づく許認可等の効力発生を条件とする。

(注) 5 . 当行は、会社法第322条第2項に規定する定款の定めはありません。

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

	第4四半期会計期間 (2019年1月1日から 2019年3月31日まで)	第95期 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
当該期間に権利行使された当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の数(個)		
当該期間の権利行使に係る交付株式数(株)		
当該期間の権利行使に係る平均行使価額等(円)		
当該期間の権利行使に係る資金調達額(百万円)		
当該期間の末日における権利行使された当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の数の累計(個)		
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の交付株式数(株)		
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の平均行使価額等(円)		
当該期間の末日における当該行使価額修正条項付新株予約権付社債券等に係る累計の資金調達額(百万円)		

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2016年4月1日 (注)	709	152,553		48,868		9,376

(注) 第二種優先株式の全部を取得し、これをすべて消却したものであります。

(5) 【所有者別状況】
普通株式

2019年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)		46	34	1,358	82	18	17,270	18,808	
所有株式数(単元)		212,759	9,338	149,887	96,613	89	353,870	822,556	298,121
所有株式数の割合(%)		25.87	1.14	18.22	11.75	0.01	43.01	100.00	

(注) 1. 自己株式21,144株は「個人その他」に211単元、「単元未満株式の状況」に44株含まれております。なお、自己株式300株は株主名簿上の株式数であり、2019年3月31日現在の実質的な所有株式数は20,844株であります。

2. 「その他の法人」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が、3単元含まれております。

第四種優先株式

2019年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)		1						1	
所有株式数(単元)		700,000						700,000	
所有株式数の割合(%)		100.00						100.00	

(注) 自己株式の所有はありません。

(6) 【大株主の状況】
所有株式数別

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を 除く。)の総 数に対する 所有株式数 の割合(%)
株式会社整理回収機構	東京都千代田区丸の内3丁目4番2号	70,000	45.89
筑波銀行行員持株会	茨城県つくば市竹園1丁目7番	3,873	2.53
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	3,228	2.11
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	3,215	2.10
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	2,185	1.43
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,602	1.05
株式会社広沢製作所	茨城県つくば市寺具1331番地の1	1,547	1.01
DFA INTL SMALL CAP VALUE PORTFOLIO(常任代理人 シティバンク、エヌエイ東京支店)	PALISADES WEST 6300, BEECAVE ROAD BUILDING ONE AUSTIN TX 78746 US (東京都新宿区新宿6丁目27番30号)	1,337	0.87
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口1)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,082	0.70
JP MORGAN CHASE BANK 385151(常任代理人 株式会社みずほ銀行決済営業部)	25 BANK STREET, CANARY WHARF, LONDON, E14 5JP, UNITED KINGDOM (東京都港区港南2丁目15番1号品川インターシティA棟)	1,017	0.66
計		89,090	58.40

(注) 発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合は、小数点第3位以下を切り捨てて表示しております。

所有議決権数別

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有議決権数 (個)	総株主の議 決権に対す る所有議決 権数の割合 (%)
筑波銀行行員持株会	茨城県つくば市竹園1丁目7番	38,737	4.71
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	32,289	3.92
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	32,155	3.91
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	21,854	2.65
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	16,020	1.94
株式会社広沢製作所	茨城県つくば市寺具1331番地の1	15,473	1.88
DFA INTL SMALL CAP VALUE PORTFOLIO(常任代理人 シティバンク、エヌエイ東京支店)	PALISADES WEST 6300, BEECAVE ROAD BUILDING ONE AUSTIN TX 78746 US (東京都新宿区新宿6丁目27番30号)	13,378	1.62
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口1)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	10,823	1.31
JP MORGAN CHASE BANK 385151(常任代理人 株式会社みずほ銀行決済営業部)	25 BANK STREET, CANARY WHARF, LONDON, E14 5JP, UNITED KINGDOM (東京都港区港南2丁目15番1号品川インターシティA棟)	10,177	1.23
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口2)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	9,732	1.18
計		200,638	24.39

(注) 総株主の議決権に対する所有議決権数の割合は、小数点第3位以下を切り捨てて表示しております。

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	第四種優先株式 70,000,000		前記「(1)株式の総数等」に記載しております。
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 20,800		
完全議決権株式(その他)	普通株式 82,234,800	822,345	
単元未満株式	普通株式 298,121		1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	普通株式 82,553,721 第四種優先株式 70,000,000		
総株主の議決権		822,345	

(注) 上記の「完全議決権株式(その他)」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式300株(議決権3個)および株主名簿上は当行名義となっておりますが、実質的には所有していない株式300株が含まれております。また、「単元未満株式」の欄には、当行所有の自己株式44株が含まれております。

【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
当行(自己保有株式)	茨城県土浦市中央二丁目 11番7号	20,800		20,800	0.01
計		20,800		20,800	0.01

(注) 株主名簿上は、当行名義となっておりますが実質的に所有していない株式が300株あります。なお、当該株式数は、上記発行済株式の「完全議決権株式(その他)」の「株式数」の欄に含まれております。また、「議決権の数」の欄には、当該完全議決権株式に係る議決権の数3個は含まれておりません。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による普通株式の取得

区 分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	2,347	617,617
当期間における取得自己株式	235	45,731

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

普通株式

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
保有自己株式数	20,844		21,079	

(注) 当期間における保有自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

利益配分につきましては、経営の健全性を確保するため、内部留保の充実による財務体質の強化を図るとともに、利益の状況や経営環境等を勘案しつつ、安定的な配当を実施することを基本方針としております。

なお、当行は、会社法第454条第5項に規定する中間配当を行うことが出来る旨、ならびに同法第459条第1項の規定に基づき、取締役会の決議によって剰余金の配当を行うことができる旨を定款に定めており、年2回の配当を実施できることとしております。

内部留保資金につきましては、財務体質の強化を図り、地域金融機関として営業力の強化等に活用してまいります。

こうした基本方針に基づき、当期の配当金につきましては、株主の皆様のご支援にお応えするため、1株当たりの配当金を、普通株式5円とさせていただきます。第四種優先株式の配当金については、預金保険機構から「優先配当年率としての資金調達コスト(平成29年度)」が「0.00%」と公表されたことから、配当率「0%」、配当額「0円」とさせていただきます。

なお、基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は以下のとおりであります。

また、銀行法第18条の定めにより剰余金の配当に制限を受けております。剰余金の配当をする場合には、会社法第445条第4項(資本金の額及び準備金の額)の規定にかかわらず、当該剰余金の配当により減少する剰余金の額に5分の1を乗じて得た額を資本準備金又は利益準備金として計上しております。

決議年月日	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2019年5月13日 取締役会決議	普通株式	412	5
	第四種優先株式	-	0

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当行は、「地域の皆さまの信頼をもとに、存在感のある銀行を目指し、豊かな社会づくりに貢献します。」を基本理念に掲げ、社会からの揺るぎない信頼を確立するために、持続的な成長および中長期的な企業価値の向上を図る観点から、コーポレート・ガバナンスの充実に取り組んでいます。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当行は、コーポレート・ガバナンスの充実を経営の重要な課題と認識し、取締役会及び監査役会を設置し、取締役の職務について厳正な監視を行う体制としております。また、取締役会を諮問する任意委員会として、経営諮問委員会、報酬諮問委員会及び指名諮問委員会を設置しております。さらに、取締役会の下位機関として常務会を設置し、取締役会に付議すべき事項の審議や常務会に委任された事項についての決定を行うとともに、執行役員制度の導入により経営の意思決定の迅速化と施策の適正な執行を促進する体制を整備しております。

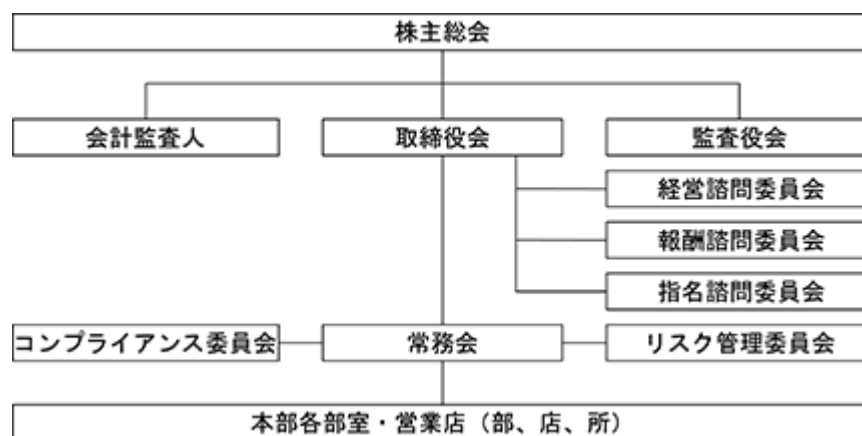
当行の各機関の目的、権限等は次のとおりであります。

名称	目的・権限	機関等の長	構成員の氏名
取締役会	会社法に定める「会社の業務の執行の決定」・「取締役の職務の執行の監督」・「代表取締役の選定および解職」等を行うことを目的とし、法令および定款に定める事項のほか、当行の重要な業務執行を決定しております。	取締役頭取 生田 雅彦	藤川 雅海、生田 雅彦、越智 悟、篠原 智、木村 伊知郎、瀬尾 達朗、豊田 高久、植木 誠、横井 のり枝（社外取締役）、根本 祐一（社外取締役）の10名
監査役会	監査に関する重要な事項について報告を受け、協議を行い、又は決議を行うことを目的とし、法令および監査役会規程等に定める権限を有するほか、監査役の組織的・効率的な活動を推進し、密接な情報交換を図る体制としております。	常勤監査役 尾崎 聡	尾崎 聡、杉山 勉、篠崎 暁（社外監査役）、堀内 巧（社外監査役）、鈴木 大輔（社外監査役）の5名
経営諮問委員会	社外役員（社外取締役・社外監査役）と経営陣・監査役との連携強化・情報交換・認識共有を図るとともに、経営上重要な事項の決定に際し独立性・客観性を担保するため、同意・意見具申等適切な関与・助言を受けることにより、公正かつ透明性の高い手続を確立することを目的としております。なお、任意の委員会であるため権限はありません。	社外取締役から互選により選出された筆頭取締役を議長とする。	横井 のり枝（社外取締役）、根本 祐一（社外取締役）、篠崎 暁（社外監査役）、堀内 巧（社外監査役）、鈴木 大輔（社外監査役）の5名
報酬諮問委員会	コーポレートガバナンス・コードの趣旨を踏まえ、取締役および監査役の報酬制度ならびに具体的な報酬額に関して恣意的な判断がなされることを防止するとともに、報酬決定に際し取締役会の機能の独立性・客観性と説明責任を強化するため、社外役員の適切な関与・助言を受けることにより客観性・透明性の高い手続を確立することを目的としております。任意の委員会であるため権限はありません。	独立社外取締役から互選により選出された取締役を議長とする。	横井 のり枝（社外取締役）、根本 祐一（社外取締役）、篠崎 暁（社外監査役）、堀内 巧（社外監査役）、鈴木 大輔（社外監査役）の5名
指名諮問委員会	コーポレートガバナンス・コードの趣旨を踏まえ、経営陣幹部の選解任及び取締役の指名に関して恣意的な判断がなされることを防止するとともに、選解任および指名に際し取締役会の機能の独立性・客観性と説明責任を強化するため、社外役員の適切な関与・助言を受けることにより客観性・透明性の高い手続を確立することを目的としております。任意の委員会であるため権限はありません。	独立社外取締役から互選により選出された取締役を議長とする。	横井 のり枝（社外取締役）、根本 祐一（社外取締役）、篠崎 暁（社外監査役）、堀内 巧（社外監査役）、鈴木 大輔（社外監査役）の5名

これらの体制を採用する理由は、これらの体制により経営監視機能の客観性および中立性が十分に確保できると考えるためであります。

また、当行は社外取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）および社外監査役との間で、会社法第427条第1項の規定に基づき、会社法第423条第1項の損害賠償責任について、その職務を行うにあたり善意でかつ重大な過失がないときは、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額をもって損害賠償責任の限度とする契約を締結しております。

（コーポレート・ガバナンス体制の概要）



企業統治に関するその他の事項

イ．内部統制システムの整備の状況

当行は「内部統制システム構築の基本方針」を以下のとおり定め、内部統制の整備・強化に努めております。

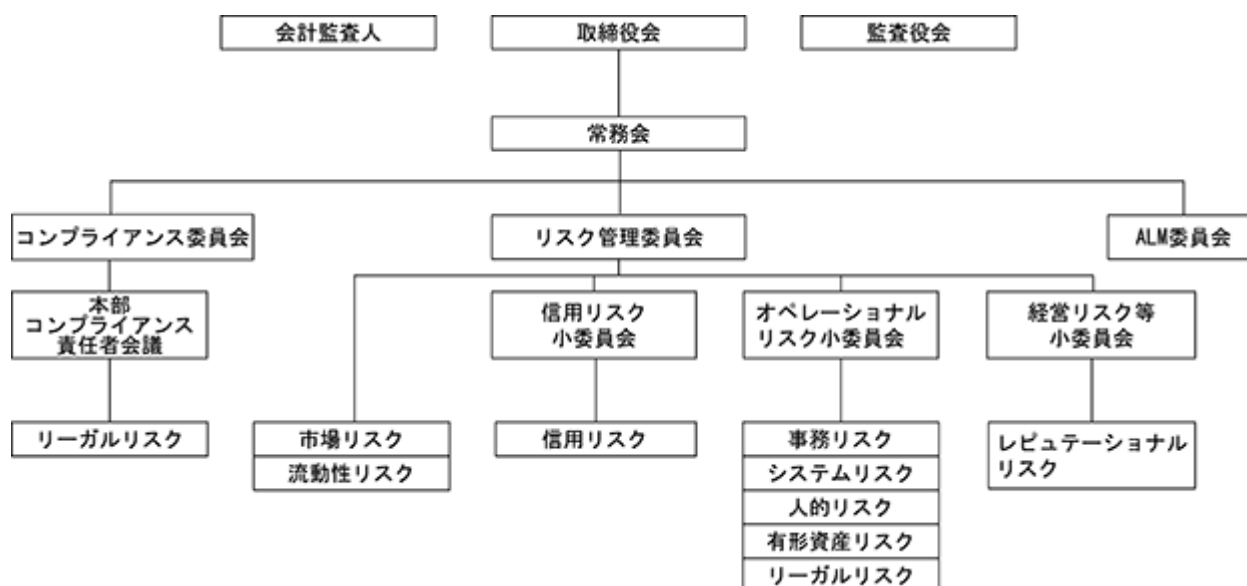
<内部統制システム構築の基本方針>

- a. 取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
 - ・当行は、企業倫理の確立と、法令遵守を経営の最重要課題のひとつとして位置づけ、その実現のためコンプライアンス基本方針および具体的な手引書であるコンプライアンス・マニュアルを制定し、コンプライアンス重視の組織風土の醸成に取り組む。
 - ・頭取を委員長とするコンプライアンス委員会において、法令等遵守に関する重要事項の審議を行う。
 - ・取締役会は、コンプライアンスの実践計画であるコンプライアンス・プログラムを決定し、コンプライアンスの徹底を図る。
 - ・当行および子会社の役職員が、法令違反のおそれのある行為等を発見した場合に通報・相談出来るよう、外部の弁護士と行内のコンプライアンス統括部署を通報・相談窓口とするコンプライアンス・ホットライン（内部通報制度）を設け、違反行為の未然防止等を図る。
 - ・取締役会は、顧客の保護と利便の向上を図るため、顧客保護等管理方針および顧客保護等管理規程等を定め、適切かつ十分な顧客への説明、顧客の相談・苦情等への対処、顧客情報管理、外部委託管理、ならびに利益相反管理を行うための態勢を整備する。
 - ・当行は、会計基準その他財務報告に関連する諸法令を遵守し、財務報告に係る内部統制の整備および運用のための方針・規程を定め、その適切性を確保する。
また、財務報告に係る内部統制の整備・運用状況の有効性を継続的に評価し、必要な改善を行う。
 - ・当行は、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力に対して毅然とした態度で臨み、同勢力からの不当要求には断固として拒絶し、利益を供与しない。
 - ・当行は、適切かつ十分な金融仲介機能を発揮するため、金融円滑化に関する方針・規程を定め、その取り組みを通じて地域社会・経済の発展に貢献する。
- b. 取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制
 - ・取締役の職務の執行に係る情報は、法令および行内規程に基づき保存、管理する。
 - ・当行は、開示すべき情報を迅速かつ網羅的に収集し、法令等に従い適時適切に開示する。
- c. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 - ・リスク管理を適切に行うため、統合的リスク管理方針および統合的リスク管理規程に基づき、リスク種類毎に所管部を定めて、リスクの特性等に応じた管理・運営に努める。
 - ・リスク管理委員会において、リスク管理の充実・強化および高度化のためのリスク管理態勢に関する事項について審議を行い、リスクの把握と的確な判断に資するため、取締役会等に対する報告を行う。
 - ・各種リスクの顕在化や不測の事態が発生した場合に適切な対応を行うための方針・規程等を定め、損害・損失の発生等を抑制する体制を構築する。
 - ・監査部署は、本部、営業店および子会社の業務を監査し、その結果法令等違反、損失の危険のある業務執行行為が発見された場合は直ちに取締役会等に報告する体制を構築する。
- d. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- ・協議・決定の効率化を図るために役付取締役により構成される常務会において、決定を委任された事項についての決議を行う。
 - ・取締役会および常務会の決議に基づく業務執行は、取締役会が選任した執行役員および各部門の責任者が職務権限等に基づきこれを行う。取締役会および各取締役はこれらを監督する権限を有し、その責任を負うものとする。
- e. 次に掲げる体制その他の当行および子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- ・子会社の取締役等の職務の執行に係る事項の当行への報告に関する体制
 - ・子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 - ・子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - ・子会社の取締役等および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
- (1)子会社における業務執行については、子会社管理基準に基づき運営、管理する統括部署を置き、適切な管理・指導を行い、業務の状況について適時報告を受ける。
- (2)当行の監査部署は、必要に応じて子会社へ立ち入り、監査を行う。
- f. 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項ならびにその使用人の取締役からの独立および使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
- ・監査役を補助すべき使用人として、補助使用人1名以上を配置することとし、監査役による補助使用人に対する指揮命令権を明確化する。また、補助使用人の権限を明確化し、補助使用人の任命、異動等については、監査役の意見を尊重するなど、補助使用人の取締役からの独立性を確保する。
- g. 次に掲げる体制その他の監査役への報告に関する体制
- ・取締役および使用人が監査役に報告するための体制
 - ・子会社の取締役等またはこれらの者から報告を受けた者が当行の監査役に報告するための体制
 - ・上記の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- (1)取締役および使用人並びに子会社の取締役等および使用人またこれらの者から報告を受けた者は、当行および子会社の業務または業績に影響を与える重要な事項について、監査役(会)に遅滞なく報告するものとする。
- また、監査役は必要に応じて、取締役および使用人並びに子会社の取締役等および使用人またはこれらの者から報告を受けた者、会計監査人等に対して報告を求めることができるものとする。
- (2)前号の報告をした者に対し、不利な取扱いを行わないことを確保する。
- h. 監査役等の職務の執行について生ずる費用の前払または償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項
- ・監査役会は、職務の執行上必要と認める費用について、あらかじめ予算を計上しておくこととする。ただし、緊急または臨時に支出した費用については、事後、償還を請求することができる。
- i. その他監査役等の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- ・監査役は、代表取締役と定期的に会合を持ち、経営方針の確認、経営課題等のほか監査について意見交換を行う。
- また、監査役は取締役会、常務会、その他重要な会議に出席し、必要に応じ意見を述べるほか、内部監査部署、コンプライアンス・リスク統括部署等との情報交換を行う体制を確保し、監査の実効性を高める。
- ロ. コンプライアンス態勢の整備の状況
- 当行にとってお客さまとの「信頼」「信用」が最大の財産であるとの認識のもと、コンプライアンスを経営の最重要課題と捉え、頭取を委員長とするコンプライアンス委員会の設置や、各営業店及び本部各部にコンプライアンス責任者としてチーフコンプライアンス・オフィサー、コンプライアンス担当者であるコンプライアンス・オフィサーを配置しております。
- そして、取締役会が策定したコンプライアンスの実践計画であるコンプライアンス・プログラムを実施しております。さらに頭取メッセージ・筑波銀行行動憲章・行員行動規範・コンプライアンス基本方針・コンプライアンス基本規程等を記載したコンプライアンス・マニュアルをパートタイマーを含む全行員へ配付するなど、コンプライアンスの周知徹底に努めております。
- また、公益通報者保護法に基づき行内の内部通報制度として外部の弁護士と行内のコンプライアンス統括部署を通報・相談窓口としたコンプライアンス・ホットラインを設置し、法令等違反行為の未然防止等によるコンプライアンス態勢の強化を図っております。
- ハ. リスク管理態勢の整備の状況
- 金融、経済の急速な変化とグローバル化の進展を背景に、金融機関の業務内容は急速に変化しており、これに伴って発生するリスクはますます多様化かつ複雑化しております。
- 当行では、お客さまから信頼される銀行であるためには、経営の健全性の維持と、安定した収益確保の観点からリスク管理を最重要課題の一つと捉え、全行を挙げて取り組んでおります。
- また、リスクマネジメントの強化のために、統合的リスク管理規程、リスク管理委員会の運営を通して、経営陣の積極的な関与のもと、リスク管理態勢の整備と運用に努めてまいります。
- 信用リスク、市場リスク、流動性リスク、オペレーショナルリスク(事務リスク、システムリスク等)、レピュテーションリスク等主要なリスク管理については、所管部がリスクの所在と大きさの把握に努め、管理

規程の整備、運用を行っております。さらに定期的開催するリスク管理委員会及び各リスクに対する小委員会において、具体的な各リスクの評価、管理方針等の検討を加え適切なリスク管理に努めております。

(リスク管理体制の概要)



二．取締役の定数

当行の取締役は15名以内とする旨を定款で定めております。

ホ．取締役の選任の決議要件

当行は、株主総会における取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行い、累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

ヘ．取締役会で決議できる株主総会決議事項

・自己株式の取得

当行は、自己の株式の取得について、経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸施策を機動的に遂行することを可能とするため、会社法第165条第2項の規定に基づき、取締役会の決議によって市場取引等により自己株式を取得することができる旨を定款に定めております。

・剰余金の配当等

当行は、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に特段の定めがある場合を除き、取締役会決議によって定めることができる旨を定款に定めております。これは、剰余金の配当等を取締役会の決議で定められることにより、株主への機動的かつ柔軟な利益還元を行うことを目的としたものであります。

ト．株主総会の特別決議要件

会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、定足数を緩和することにより株主総会の円滑な運営を行うことを目的として、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。

チ．種類株式

当行は、自己資本の充実を図り、財務基盤を強化するため、会社法第108条第1項第3号に定める内容（いわゆる議決権制限）について普通株式と異なる定めをした議決権のない優先株式を発行しております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性14名 女性1名 (役員のうち女性の比率 6%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役会長 (代表取締役)	藤川 雅海	1952年10月13日生	1976年4月 関東銀行入行 2002年2月 同行ひたちなか支店長 2003年4月 関東つくば銀行ひたちなか支店長 2003年9月 同行研究学園都市支店長兼研究学園都市支店つくばアッセ出張所長 2004年7月 同行総合企画部長 2006年6月 同行取締役総合企画部長 2007年6月 同行常務取締役総合企画部長 2007年7月 同行常務取締役 2008年4月 同行専務取締役 2010年3月 当行専務取締役 2011年4月 同行取締役副頭取 2012年6月 同行取締役頭取 2019年6月 同行取締役会長(現職)	(注) 3	普通株式 129,900
取締役頭取 (代表取締役)	生田 雅彦	1960年10月12日生	1984年4月 関東銀行入行 2006年4月 関東つくば銀行石岡支店長 2007年7月 同行総合企画部副部長 2010年3月 当行総合企画部副部長兼共同化推進室長 2010年8月 同行神栖支店長兼営業本部上席主任調査役 2012年7月 同行執行役員総合企画部長 2014年4月 同行上席執行役員総合企画部長 2015年4月 同行上席執行役員営業本部長 2015年6月 同行取締役営業本部長 2016年4月 同行常務取締役 2018年6月 同行取締役副頭取 2019年6月 同行取締役頭取(現職)	(注) 3	普通株式 44,500
専務取締役 (代表取締役)	越智 悟	1960年11月15日生	1984年4月 茨城相互銀行入行 2006年6月 茨城銀行竜ヶ崎支店長 2008年6月 同行事務部長 2010年3月 当行上席執行役員(事務部・人事部担当) 2011年4月 同行上席執行役員ブロック長(牛久ブロック担当) 2011年10月 同行上席執行役員ブロック長(水戸ブロック担当) 2012年4月 同行上席執行役員事務統括部長 2013年4月 同行常務執行役員営業本部長 2015年4月 同行常務執行役員(市場金融部・総務部担当) 2015年6月 同行常務取締役 2018年6月 同行専務取締役(現職)	(注) 3	普通株式 44,500
専務取締役	篠原 智	1961年4月22日生	1985年4月 関東銀行入行 2005年4月 関東つくば銀行谷田部支店長 2007年10月 同行法人部副部長 2010年3月 当行営業統括部副部長兼資産運用推進室長 2010年10月 同行筑西支店長 2012年7月 同行執行役員筑西支店長兼下館支店長 2012年11月 同行執行役員営業本部副本部長 2014年4月 同行上席執行役員営業本部副本部長 2015年4月 同行上席執行役員営業推進部長兼地区本部長 2015年7月 同行常務執行役員営業推進部長兼地区本部長 2015年10月 同行常務執行役員営業推進部長 2016年4月 同行常務執行役員営業本部長 2016年6月 同行取締役営業本部長 2017年6月 同行常務取締役営業本部長 2018年6月 同行専務取締役営業本部長 2019年4月 同行専務取締役(現職)	(注) 3	普通株式 36,300

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
常務取締役	木村 伊知郎	1959年11月7日生	1984年4月 茨城相互銀行入行 2000年6月 茨城銀行常北支店長 2002年4月 同行総合企画部主任調査役 2003年6月 同行江戸崎支店長 2003年10月 同行江戸崎支店長兼美浦支店長 2006年6月 同行高萩支店長 2007年6月 同行牛久支店長 2008年6月 同行竜ヶ崎支店長 2010年1月 同行営業統括部副部長 2010年3月 当行営業本部ブロック長(鹿嶋ブロック担当) 2011年4月 同行水戸営業部長 2012年7月 同行執行役員水戸営業部長 2014年4月 同行上席執行役員営業本部副本部長 2015年4月 同行上席執行役員地区本部長 2016年4月 同行上席執行役員営業推進部長 2017年4月 同行常務執行役員営業副本部長 2017年6月 同行常務取締役(現職)	(注)3	普通株式 26,500
常務取締役	瀬尾 達朗	1963年8月28日生	1986年4月 関東銀行入行 2005年7月 関東つくば銀行大みか支店長 2007年10月 同行ひたちなか支店長 2010年3月 当行ひたちなか支店長 2011年10月 同行日立支店長 2013年4月 同行融資部長 2014年4月 同行執行役員融資部長 2015年10月 同行執行役員本店エリア長兼本店営業部長兼土浦駅前支店長 2016年4月 同行上席執行役員本店エリア長兼本店営業部長兼土浦駅前支店長 2017年6月 同行取締役本店エリア長兼本店営業部長兼土浦駅前支店長 2018年6月 同行常務取締役(現職)	(注)3	普通株式 22,800
常務取締役 営業本部長	豊田 高久	1962年7月17日生	1985年4月 関東銀行入行 2004年10月 関東つくば銀行太田支店長 2007年10月 同行多賀支店長 2008年11月 同行日立支店長 2010年3月 当行日立支店長 2011年10月 同行営業推進部長 2011年12月 同行営業推進部長兼営業企画部長 2012年4月 同行営業企画部長 2013年4月 同行執行役員本店営業部長兼土浦駅前支店長 2013年5月 同行執行役員本店エリア長兼本店営業部長兼土浦駅前支店長 2015年4月 同行上席執行役員本店エリア長兼本店営業部長兼土浦駅前支店長 2015年10月 同行上席執行役員地区本部長 2017年4月 同行上席執行役員営業推進部長 2018年4月 同行常務執行役員営業推進部長 2018年6月 同行常務取締役 2019年4月 同行常務取締役営業本部長(現職)	(注)3	普通株式 38,963
取締役	植木 誠	1954年3月1日生	1977年4月 茨城相互銀行入行 1998年6月 茨城銀行友部支店長 2001年4月 同行東京支店長 2003年1月 同行綾瀬支店長兼総合企画部東京事務所業務担当 2005年6月 同行取締役審査部長 2008年4月 同行取締役営業統括部長 2008年6月 同行常務取締役リスク統括部長 2008年10月 同行常務取締役審査部長 2010年3月 当行専務取締役融資本部長 2011年4月 同行専務取締役営業本部長 2012年4月 同行専務取締役 2012年6月 同行取締役副頭取 2016年4月 同行取締役会長 2019年6月 同行取締役(現職)	(注)3	普通株式 102,480

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	横井 のり枝	1972年6月27日生	1998年3月 アンダーセンコンサルティング入社 2000年6月 同社退社 2000年7月 株式会社トークス入社 2003年6月 同社退社 2003年7月 財団法人流通経済研究所入所 2011年3月 同法人退所 2011年4月 流通経済大学流通情報学部専任講師 2014年4月 流通経済大学流通情報学部准教授 2016年6月 当行取締役(非常勤)(現職) 2019年3月 流通経済大学流通情報学部准教授退任 2019年4月 日本大学経済学部准教授(現職) 2019年4月 流通経済大学流通情報学部講師(非常勤)(現職)	(注)3	普通株式 3,000
取締役	根本 祐一	1952年9月30日生	1976年4月 茨城県信用保証協会入協 2006年4月 同協会本店営業部長 2008年4月 同協会土浦支店長 2011年4月 同協会監事 2015年3月 同協会監事退任 2015年4月 同協会理事 2016年3月 同協会理事退任 2016年4月 同協会参与指導検査室長委嘱 2018年3月 同協会退職 2019年6月 当行取締役(非常勤)(現職)	(注)3	普通株式
常勤監査役	尾崎 聡	1962年3月24日生	1984年4月 関東銀行入行 2010年3月 当行融資部副部長 2010年8月 同行牛久支店長 2011年10月 同行融資管理部長 2012年7月 同行融資部長 2013年4月 同行執行役員融資本部副本部長 2013年7月 同行執行役員融資本部長 2014年4月 同行上席執行役員融資本部長 2015年6月 同行取締役融資本部長 2016年4月 同行取締役 2017年6月 同行常勤監査役(現職)	(注)4	普通株式 30,400
常勤監査役	杉山 勉	1961年10月29日生	1985年4月 茨城相互銀行入行 2001年10月 茨城銀行赤塚支店長 2005年4月 同行小山支店長 2005年5月 同行営業推進部主任調査役 2005年6月 同行東海支店長 2007年4月 同行本店営業部部長代理 2009年4月 同行綾瀬支店長 2010年3月 当行綾瀬支店長 2010年8月 同行東京支店長 2011年10月 同行牛久支店長 2012年11月 同行事務統括部長 2014年4月 同行執行役員水戸営業部長 2016年4月 同行上席執行役員地区本部長 2018年7月 同行上席執行役員営業推進部長 2019年4月 同行上席執行役員営業副本部長 2019年6月 同行常勤監査役(現職)	(注)5	普通株式 11,800
監査役	篠崎 暁	1951年4月23日生	1974年4月 安田火災海上保険株式会社入社 1992年4月 同社茨城支店水戸支社長 1997年4月 同社茨城支店長 1999年7月 同社代理店業務開発部長 2002年7月 株式会社損害保険ジャパン代理店業務推進部長 2004年4月 同社執行役員兼仙台支店長 2004年7月 同社執行役員兼業務監査部長 2007年4月 株式会社損害保険ジャパン・ハートフルライン代表取締役社長 2008年4月 損保ジャパンDC証券株式会社監査役 2010年6月 輸出入・港湾関連情報処理センター株式会社監査役 2014年7月 株式会社損害保険ジャパン顧問 2014年9月 損害保険ジャパン日本興亜株式会社顧問 2015年3月 損害保険ジャパン日本興亜株式会社退職 2015年6月 当行監査役(非常勤)(現職)	(注)4	普通株式 4,000

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
監査役	堀内 巧	1948年 1月16日生	1975年 1月 監査法人朝日会計社(現有限責任 あずさ監査法人)入社 1980年 3月 公認会計士登録 2000年 6月 朝日監査法人(現有限責任 あずさ監査法人)代表社員 2010年 6月 あずさ監査法人(現有限責任 あずさ監査法人)退社 2010年 7月 公認会計士堀内巧事務所設立(現職) 2011年11月 三井不動産プライベートリート投資法人監督役員(現職) 2012年 1月 日本公認会計士協会自主規制・業務本部主任研究員 2014年 8月 全国農業協同組合中央会監事(現職) 2015年 3月 株式会社日本レジストリサービス監査役(現職) 2016年 6月 当行監査役(非常勤)(現職)	(注) 4	普通株式 3,000
監査役	鈴木 大輔	1972年 5月30日生	2000年 4月 司法修習生 2001年10月 検事任官 2012年11月 湊総合法律事務所入所 2017年 8月 瀧美坂井法律事務所・外国法共同事業入所(現職) 2019年 6月 当行監査役(非常勤)(現職)	(注) 4	普通株式
計					普通株式 498,143

- (注) 1. 取締役横井のり枝及び根本祐一は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。
2. 監査役篠崎暁、堀内巧及び鈴木大輔は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。
3. 取締役の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
4. 監査役尾崎聡、篠崎暁、堀内巧及び鈴木大輔の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2023年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
5. 監査役杉山勉の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

社外役員の状況

当行の社外取締役は2名であり、長年にわたり経済産業界に係る研究や地域金融の円滑化に携わっており、その経歴を通じて培われた幅広い見識から、取締役会に対して有益なアドバイスを行うとともに、職務執行の妥当性及び銀行の経営全般に対する的確な助言とチェック機能を果たせるものと考えております。

当行の社外監査役は3名であり、弁護士や公認会計士、会社役員としての経験に基づく高い見識により、経営監視機能の客観性及び中立性を確保し、当行の経営執行等の適法性・妥当性について、独立した立場から監査を行い、経営の監督機能の一層の強化が期待できるものと考えております。

社外取締役及び社外監査役の選任にあたっては、株式会社東京証券取引所が定める独立役員の確保にあたっての選定基準等を踏まえた当行の社外取締役(監査役)の独立性基準に基づき、幅広い見識を持ち、各専門分野や経営に関する豊富な知識経験からの的確な助言とチェック機能を果たすことが可能で一般株主と利益相反が生じるおそれがない者を選任しております。

当行の社外役員はいずれもその他の取締役、監査役と人的関係を有しておらず、当行との間に通常の銀行取引等を除き、一般株主と利益相反が生じるおそれのあるような事情はないものと判断しております。

なお、社外取締役、社外監査役との関係は以下のとおりであります。

- イ. 社外取締役横井のり枝は、当行との取引関係その他利害関係はありません。また、同氏は当行の株式を保有しており、その所有株式数は「役員一覧」の所有株式数の欄に記載のとおりであります。発行済株式数に占める割合は僅少であり、重要性はないものと判断しております。
- あわせて同氏は、東京証券取引所に対し、独立役員として届出を行っております。
- ロ. 社外取締役根本祐一は、当行との取引関係その他利害関係はありません。
- あわせて同氏は、東京証券取引所に対し、独立役員として届出を行っております。
- ハ. 社外監査役篠崎暁は、当行との取引関係その他利害関係はありません。また、同氏は当行の株式を保有しており、その所有株式数は「役員一覧」の所有株式数の欄に記載のとおりであります。発行済株式数に占める割合は僅少であり、重要性はないものと判断しております。
- あわせて同氏は、東京証券取引所に対し、独立役員として届出を行っております。
- ニ. 社外監査役堀内巧は、当行との取引関係その他利害関係はありません。また、同氏は当行の株式を保有しており、その所有株式数は「役員一覧」の所有株式数の欄に記載のとおりであります。発行済株式数に占める割合は僅少であり、重要性はないものと判断しております。
- あわせて同氏は、東京証券取引所に対し、独立役員として届出を行っております。
- ホ. 社外監査役鈴木大輔は、当行との取引関係その他利害関係はありません。
- あわせて同氏は、東京証券取引所に対し、独立役員として届出を行っております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、取締役会等の重要な会議に出席し、議案審議等に必要な発言を適宜行うなど外部的な視点からの取締役の業務執行に対するアドバイスをしております。

社外監査役は、監査役会で定めた監査計画等に従い、取締役会等の重要な会議への出席や、業務及び財産の状況調査を通して、取締役の職務執行を監査しております。また、会計監査人と定期的な会合を持ち、意見交換を行うことで十分な連携を保っているほか、内部監査部門や内部統制部門からの報告及び常勤監査役から監査役監査の報告を受け、適切な提言・助言を行うとともに、監査機能の有効性、効率性を高めるため、常勤監査役との連携強化に努めております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

当行は、監査役会制度を採用しており、監査役全員をもって監査役会を構成しております。監査役5名のうち、2名は常勤監査役であり、3名は非常勤の社外監査役であります。

当行の監査体制は、内部監査及び監査役監査ならびに会計監査人等の外部監査から成り、相互に連携を密にし、お互い補完することにより健全な業務運営の確保を目的として行っております。

また、監査役は本部及び営業店を往査し業務執行状況を監査しております。会計監査人による本部内監査実施時には随時問題点、課題等について意見交換を行い、子会社及び営業店監査実施時には常勤監査役が必要に応じて立会い監査終了後に意見交換を行うなど連携を強化しております。

内部監査の状況

当行では、内部監査として監査部（事業年度末現在19人）が営業店及び本部、子会社の業務監査を実施しており、監査部長は、毎年度監査の基本方針を立案し、取締役会の承認を得ております。監査部は、その業務遂行に関して、被監査部署から独立し、いかなる影響、干渉も受けておりません。監査の結果については、被監査部署の部長及び役付者に講評するほか、速やかに取締役会に報告しております。

さらに、監査部では貸出金等の自己査定結果と償却・引当の監査及び開示債権についての監査を実施し、監査結果を取締役に報告しております。

会計監査の状況

イ．監査法人の名称

有限責任 あずさ監査法人

ロ．業務を執行した公認会計士

業務執行社員の寺澤 豊氏及び宮田 世紀氏

ハ．監査業務に係る補助者の構成

公認会計士8名、その他7名

二．監査法人の選定方針と理由

監査役会は、会計監査人の再任に関して、監査役監査基準第33条2項の定めに基づき、業務執行部門及び会計監査人から必要な資料の提出を受け、監査法人の業務運営が適正に行われているか検証を行いました。この結果、会計監査人の監査の方法と結果を相当と認め、監査役会は有限責任 あずさ監査法人を再任することが適当であると判断しました。

なお、監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に該当する場合、又は会社法・公認会計士法等の法令に違反・抵触した場合及び公序良俗に反する行為があったと判断された場合には、会計監査人の解任又は不再任を決定する方針であります。

ホ．監査役及び監査役会による監査法人の評価

日本監査役協会が定める「会計監査人監査の相当性判断」及び「会計監査人の品質管理」に関するチェックリストに基づき、監査法人の業務運営が適正に行われているか検証を行いました。

監査報酬の内容等

イ．監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	67	1	64	6
連結子会社	1		1	
計	68	1	65	6

ロ．監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容

前連結会計年度

日本版C R S対応の指導・助言業務等であります。

当連結会計年度

日本版C R S対応の指導・助言業務、AML / C F T態勢に関する支援業務等であります。

ハ．監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬（イ．を除く）

該当事項はありません

ニ．その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

ホ．監査報酬の決定方針

該当事項はありません。

ヘ．監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、会計監査人の監査計画の内容及び従前の事業年度における職務執行状況や報酬実績等について必要な検証を行ったうえで、会計監査人の報酬等について、会社法第399条第1項の同意を行いました。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

当行は役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針を定めており、その内容は、株主総会で定められた報酬月額限度額の範囲内で、取締役については取締役会の決議により、監査役については監査役会の決議により決定しております。また役員賞与については、業績に連動した報酬としての性格を明確にするため、上記の報酬とは別に年間限度額を定めております。

当行の役員の報酬等に関する株主総会の決議年月日は2009年9月18日であり、取締役（14人）の報酬額については月額30百万円以内、監査役（5人）の報酬額については月額6百万円以内と決議しています。

当行の役員報酬の額又は算定方法の決定に関する方針の決定権限を有する者は取締役会及び監査役会であり、その権限の内容及び裁量の範囲は、取締役会の諮問機関として設置している社外役員で構成されている報酬諮問委員会の意見を最大限尊重したうえで、取締役会で決議することにより、意思決定の透明性・公正性を確保しています。

また、報酬諮問委員会は取締役・監査役の報酬に関する議案の原案に対する諮問、取締役の個人別報酬額に対する諮問及び取締役の報酬の決定に関する方針・手続に対する諮問に対して意見具申を行っております。

なお、当事業年度における当行役員の報酬等の額については、2018年7月27日の取締役会にて経営陣幹部・取締役の報酬の件を決議しました。また、報酬諮問委員会を新たに2019年1月31日に設置し、現行の役員報酬制度について出席者全員の了解を得ました。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

当事業年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

役員区分	員数	報酬等の総額				
		(百万円)	固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	その他
取締役 (社外取締役を除く)	9	199	199			
監査役 (社外監査役を除く)	2	36	36			
社外役員	5	24	24			

(注) 1．取締役及び社外役員の員数及び報酬等の総額には、第94期定時株主総会で退任した取締役1名を含んでおります。

2．上記のほか、取締役1名に対し、使用人としての報酬2百万円を支払っております。

提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当行は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分について、専ら株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的として保有する株式を純投資とし、配当金収入に加え、当行及び取引先の持続的な成長や中長期的な企業価値の向上及び地域社会の発展に資することも考慮のうえ保有する株式（みなし保有株式を含む、子会社および関連会社株式を除く）を純投資目的以外の目的である投資株式（政策保有株式）として区分しています。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

イ．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当行は、政策保有株式について、当行の経営戦略及び企業が当行の営業基盤である地域経済の成長へ貢献しているか等に照らし、当行の企業価値の維持・向上や地域経済の成長に資すると判断される企業の株式を保有しております。保有の適否については、個別銘柄ごとに、保有目的の適切性、保有に伴う便益やリスクが当行の経営計画における資本コストを踏まえた資本効率性に関する指標に見合っているかを定期的に精査・検証し、総合的に判断を行います。保有の意義が希薄となったと考えられる株式については、株式保有リスクの抑制や資本の効率性等の観点から、取引先企業との十分な対話を行ったうえで縮減していくことを基本方針とします。

また、上場株式にかかる保有の合理性については、「保有目的の適切性」の確認を行うとともに、「リスク・リターン指標（RORA等）」の基準値を設定し、個社毎に検証を実施します。「保有目的の適切性」の確認の結果、保有の意義が希薄となっていると判断される場合および「リスク・リターン指標」が基準値を下回る場合、簿価に対する評価損益の状況、投資先の県内関連性の有無、業務提携・再生支援目的の有無、投資先の成長性、銀行取引の中長期的採算性等を加味し、保有の適否を総合的に判断します。なお、当行の取締役会は、2019年3月末基準で行った検証の結果、上場株式22銘柄について政策保有株式として保有の合理性が認められると判断しました。

ロ．銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	74	921
非上場株式以外の株式	22	2,310

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	3	24	地域経済への貢献、企業の再生支援及び戦略上の保有意義等に資すると総合的に判断したもの
非上場株式以外の株式			

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

該当ありません。

八．特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

(特定投資株式)

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果(注1) 及び株式数が増加した理由	当行の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
SOMPOホールディングス株式会社	184,250	184,250	当社との取引状況・経緯および業務の関連性を踏まえ、総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	755	788		
株式会社京葉銀行	304,406	608,812	当社との取引状況・経緯を踏まえ、今後の関係性維持・強化や採算性改善の余地を見込んでおり、総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。なお、株式数が前事業年度から減少したのは、2018年10月に当社が株式併合を行ったことによるものであります。	有
	196	289		
株式会社栃木銀行	781,550	781,550	当社とは顧客利便性向上を目的としたATM提携や営業戦略上重要な地域振興協定締結先であり様々な分野で協力関係にあること等を加味し、総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	183	320		
サイバーダイナミクス株式会社	240,000	240,000	当社は県内に関連企業を有しており、地域経済への貢献度合や県内関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	無
	164	361		
株式会社千葉銀行	254,000	254,000	当社とは顧客利便性の向上を目的としたATM提携等の分野で協力関係にあること等を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	152	217		
株式会社東京精密	50,000	50,000	当社は県内に関連企業を有しており、地域経済への貢献度合や県内関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	140	214		
野村ホールディングス株式会社	316,500	316,500	当社は当行の幹事証券会社であるほか様々な分野で協力関係にあること等を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	126	194		
MS&ADインシュアランスグループホールディングス株式会社	35,258	35,258	当社との取引状況・経緯および業務の関連性を踏まえ、総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	118	118		
株式会社ジョイフル本田	64,600	32,300	当社は県内に関連企業を有しており、地域経済への貢献度合や県内関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。なお、株式数が前事業年度から増加したのは、2018年6月に当社が株式分割を行ったことによるものであります。	有
	90	124		
総合警備保障株式会社	17,000	17,000	当社は県内に関連企業を有しており、地域経済への貢献度合や県内関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	81	89		
株式会社コンコルディア・フィナンシャルグループ	133,086	133,086	当社とは顧客利便性の向上を目的としたATM提携等の分野で協力関係にあること等を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	56	78		
株式会社タカラレーベン	162,000	162,000	保有に関する経済合理性を有するほか、当社の地域経済への貢献度合や営業戦略上の関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	55	74		
株式会社東京きらぼしフィナンシャルグループ	25,974	25,974	当社とは顧客利便性の向上を目的としたATM提携等の分野で協力関係にあること等を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	40	65		
ホリイフードサービス株式会社	60,000	60,000	当社は県内に関連企業を有しており、地域経済への貢献度合や県内関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	36	45		

株式会社千葉興業銀行	103,800	103,800	当社とは顧客利便性の向上を目的としたATM提携等の分野で協力関係にあること等を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	31	47		
株式会社武蔵野銀行	11,600	11,600	当社とはシステム共同化や顧客利便性の向上を目的としたATM提携を含む様々な分野で協力関係にあること等を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	25	38		
水戸証券株式会社	96,000	96,000	当社は県内に関連企業を有しており、地域経済への貢献度合や県内関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	19	40		
株式会社ジャックス	7,400	7,400	当社とはローン保証提携等の分野で協力関係にあること等営業戦略上の関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	13	17		
株式会社ティビィシー・スキヤット	8,000	8,000	当社は県内に関連企業を有しており、地域経済への貢献度合や県内関連性を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	無
	10	11		
株式会社みずほフィナンシャルグループ	44,552	44,552	保有に関する経済合理性を有するほか、当社とは証券代行等の業務委託や様々な分野で協力関係にあること等を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	7	8		
株式会社大和証券グループ本社	3,000	3,000	保有に関する経済合理性を有するほか、当社は当行の幹事証券会社であるほか様々な分野で協力関係にあること等を加味し総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	有
	1	2		
日本銀行	10	10	本邦の中央銀行であることを踏まえ総合的に判断した結果、合理性が認められるため保有しております。	無
	0	0		

- (注) 1. 定量的な保有効果は、個別の取引状況等を開示できないため記載が困難であります。
2. 保有の合理性は、「保有目的の適切性」の確認を行うとともに、「リスク・リターン指標（RORA等）」の基準値を設定し、個社毎に検証を実施します。

(みなし保有株式)

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果(注2)及び株式数が増加した理由	当行の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
住友不動産株式会社	249,000	249,000	議決権行使の指図のため保有しております。	有
	1,141	979		
ユニテッド・スーパーマーケット・ホールディングス株式会社	325,000	325,000	議決権行使の指図のため保有しております。	有
	355	367		
東京海上ホールディングス株式会社	65,000	65,000	議決権行使の指図のため保有しております。	有
	348	307		
株式会社宮崎銀行	66,300	66,300	議決権行使の指図のため保有しております。	有
	183	219		
株式会社琉球銀行	119,500	119,500	議決権行使の指図のため保有しております。	有
	134	193		
株式会社千葉興業銀行	192,000	192,000	議決権行使の指図のため保有しております。	有
	57	88		
株式会社みずほフィナンシャルグループ	104,400	104,400	議決権行使の指図のため保有しております。	有
	17	19		

- (注) 1. 上記「みなし保有株式」は、すべて退職給付信託に信託設定したものであります。
2. 定量的な保有効果は、個別の取引状況等を開示できないため記載が困難であります。
3. 保有の合理性は、「保有目的の適切性」の確認を行うとともに、「リスク・リターン指標（RORA等）」の基準値を設定し、個社毎に検証を実施します。

保有目的が純投資目的である投資株式

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計 上額の合計額 (百万円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計 上額の合計額 (百万円)
非上場株式	1	180	1	180
非上場株式以外の株式	20	1,838	76	5,082

区分	当事業年度		
	受取配当金の 合計額(百万円)	売却損益の 合計額(百万円)	評価損益の 合計額(百万円)
非上場株式	3		
非上場株式以外の株式	82	448	114

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものの該当ありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものの該当ありません。

第5 【経理の状況】

1. 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(1982年大蔵省令第10号)に準拠しております。

なお、当連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」(2018年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。)による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

2. 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(1982年大蔵省令第10号)に準拠しております。

なお、当事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の財務諸表に含まれる比較情報のうち、改正府令による改正後の財務諸表規則第8条の12第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第2条第2項により、改正前の財務諸表規則に基づいて作成しております

3. 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(自2018年4月1日 至2019年3月31日)の連結財務諸表及び事業年度(自2018年4月1日 至2019年3月31日)の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人の監査証明を受けております。

4. 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構に加入し、同財団等の主催する研修に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
資産の部				
現金預け金	7	161,941	7	226,881
買入金銭債権		5,754		5,829
商品有価証券		700		453
金銭の信託		2,970		3,000
有価証券	1, 7, 12	569,734	1, 7, 12	473,603
貸出金	2, 3, 4, 5, 6, 8	1,633,318	2, 3, 4, 5, 6, 8	1,646,779
外国為替		6,811		5,349
その他資産	7	17,487	7	18,283
有形固定資産	10, 11	23,792	10, 11	23,800
建物		10,728		11,744
土地	9	10,479	9	10,174
建設仮勘定		830		34
その他の有形固定資産	9	1,753	9	1,847
無形固定資産		3,066		4,161
ソフトウェア		1,730		2,224
その他の無形固定資産		1,336		1,937
退職給付に係る資産		1,894		2,268
繰延税金資産		3,426		2,739
支払承諾見返		1,665		1,271
貸倒引当金		12,379		12,791
資産の部合計		2,420,184		2,401,627
負債の部				
預金	7	2,275,005	7	2,245,886
債券貸借取引受入担保金	7	20,000	7	29,483
外国為替		77		164
その他負債		10,245		10,801
賞与引当金		852		829
退職給付に係る負債		1,883		1,732
役員退職慰労引当金		9		10
執行役員退職慰労引当金		45		51
睡眠預金払戻損失引当金		280		252
ポイント引当金		14		13
利息返還損失引当金		0		
偶発損失引当金		295		310
再評価に係る繰延税金負債	9	357	9	357
支払承諾		1,665		1,271
負債の部合計		2,310,734		2,291,167

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部		
資本金	48,868	48,868
資本剰余金	30,447	30,447
利益剰余金	28,211	28,862
自己株式	6	6
株主資本合計	107,521	108,171
その他有価証券評価差額金	784	1,294
土地再評価差額金	9 413	9 413
退職給付に係る調整累計額	730	582
その他の包括利益累計額合計	1,928	2,289
純資産の部合計	109,449	110,460
負債及び純資産の部合計	2,420,184	2,401,627

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
経常収益	40,606	38,119
資金運用収益	27,466	26,940
貸出金利息	22,208	21,074
有価証券利息配当金	5,170	5,778
コールローン利息及び買入手形利息	0	10
預け金利息	37	34
その他の受入利息	48	63
役務取引等収益	7,815	7,432
その他業務収益	2,345	1,637
その他経常収益	2,979	2,108
償却債権取立益	275	315
その他の経常収益	¹ 2,704	¹ 1,792
経常費用	35,673	36,123
資金調達費用	911	920
預金利息	352	274
コールマネー利息及び売渡手形利息	1	0
債券貸借取引支払利息	491	647
借入金利息	0	0
その他の支払利息	68	
役務取引等費用	3,727	3,723
その他業務費用	2,043	2,385
営業経費	² 27,441	² 26,661
その他経常費用	1,549	2,432
貸倒引当金繰入額	441	1,509
その他の経常費用	³ 1,107	³ 923
経常利益	4,933	1,995
特別利益	10	2
固定資産処分益	10	2
特別損失	158	209
固定資産処分損	115	45
減損損失	⁴ 43	⁴ 163
税金等調整前当期純利益	4,785	1,788
法人税、住民税及び事業税	465	308
法人税等調整額	1,283	396
法人税等合計	1,748	704
当期純利益	3,037	1,083
親会社株主に帰属する当期純利益	3,037	1,083

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
当期純利益	3,037	1,083
その他の包括利益	1 1,186	1 362
その他有価証券評価差額金	731	510
退職給付に係る調整額	454	148
包括利益	4,223	1,446
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	4,223	1,446

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	48,868	30,447	25,624	5	104,935
当期変動額					
剰余金の配当			451		451
親会社株主に帰属する当期純利益			3,037		3,037
自己株式の取得				0	0
土地再評価差額金の取崩			0		0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計			2,586	0	2,585
当期末残高	48,868	30,447	28,211	6	107,521

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	52	414	275	742	105,677
当期変動額					
剰余金の配当					451
親会社株主に帰属する当期純利益					3,037
自己株式の取得					0
土地再評価差額金の取崩					0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	731	0	454	1,185	1,185
当期変動額合計	731	0	454	1,185	3,771
当期末残高	784	413	730	1,928	109,449

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	48,868	30,447	28,211	6	107,521
当期変動額					
剰余金の配当			433		433
親会社株主に帰属する当期純利益			1,083		1,083
自己株式の取得				0	0
土地再評価差額金の取崩			0		0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計			650	0	650
当期末残高	48,868	30,447	28,862	6	108,171

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	784	413	730	1,928	109,449
当期変動額					
剰余金の配当					433
親会社株主に帰属する当期純利益					1,083
自己株式の取得					0
土地再評価差額金の取崩					0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	510	0	148	361	361
当期変動額合計	510	0	148	361	1,011
当期末残高	1,294	413	582	2,289	110,460

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	4,785	1,788
減価償却費	2,122	2,176
減損損失	43	163
貸倒引当金の増減()	1,806	411
賞与引当金の増減額(は減少)	5	23
退職給付に係る資産の増減額(は増加)	1,894	373
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	693	150
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	0	0
執行役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	8	6
睡眠預金払戻損失引当金の増減()	35	28
ポイント引当金の増減額(は減少)	0	1
利息返還損失引当金の増減額(は減少)	0	0
偶発損失引当金の増減()	13	14
資金運用収益	27,466	26,940
資金調達費用	911	920
有価証券関係損益()	1,831	69
金銭の信託の運用損益(は運用益)	68	107
為替差損益(は益)	2,267	1,610
固定資産処分損益(は益)	104	43
貸出金の純増()減	36,295	13,461
預金の純増減()	39,795	29,118
預け金(現金同等物を除く)の純増()減	741	2,698
コールローン等の純増()減	2,968	74
債券貸借取引受入担保金の純増減()		9,483
外国為替(資産)の純増()減	5,228	1,461
外国為替(負債)の純増減()	11	87
商品有価証券の純増()減	116	247
資金運用による収入	27,458	27,392
資金調達による支出	981	971
その他	410	7,681
小計	86,632	39,112
法人税等の支払額	472	428
営業活動によるキャッシュ・フロー	86,159	39,540
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	162,949	68,334
有価証券の売却による収入	84,680	112,127
有価証券の償還による収入	73,366	61,970
金銭の信託の増加による支出	2,000	29
有形固定資産の取得による支出	2,225	1,523
無形固定資産の取得による支出	1,165	2,032
有形固定資産の除却による支出	105	32
資産除去債務の履行による支出	26	32
有形固定資産の売却による収入	105	103
無形固定資産の売却による収入	0	
投資活動によるキャッシュ・フロー	10,319	102,216

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
配当金の支払額	451	433
自己株式の取得による支出	0	0
財務活動によるキャッシュ・フロー	452	434
現金及び現金同等物に係る換算差額	0	0
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	75,387	62,241
現金及び現金同等物の期首残高	79,050	154,438
現金及び現金同等物の期末残高	1 154,438	1 216,679

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社 4社

連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。

(2) 非連結子会社

該当ありません。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社

該当ありません。

(2) 持分法適用の関連会社

該当ありません。

(3) 持分法非適用の非連結子会社

該当ありません。

(4) 持分法非適用の関連会社

該当ありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

(1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。

12月末日 1社

3月末日 3社

(2) 連結子会社については、それぞれの決算日の財務諸表により連結しております。

連結決算日と上記の決算日等との間に生じた重要な取引については、必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）により行っております。

(2) 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、その他有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

(4) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産

有形固定資産は、定率法（ただし、1998年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）並びに2016年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法）を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物：13年～50年

その他：5年～20年

無形固定資産

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間（5年）に基づいて償却しております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下「破綻懸念先」という。）に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額のうち取立不能見込額を債権額から直接減額しており、その金額は24,326百万円（前連結会計年度末は23,934百万円）であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

(6) 賞与引当金の計上基準

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

(7) 役員退職慰労引当金の計上基準

役員退職慰労引当金は、連結子会社の役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を計上しております。

(8) 執行役員退職慰労引当金の計上基準

執行役員退職慰労引当金は、執行役員への退職慰労金の支払いに備えるため、執行役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を計上しております。

(9) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。

(10) ポイント引当金の計上基準

ポイント引当金は、クレジットカード利用促進を目的とするポイント制度に基づき、クレジットカード会員に付与したポイントの使用により発生する費用に備えるため、ポイント使用実績等に基づく将来の使用見込額を計上しております。

(11) 利息返還損失引当金の計上基準

利息返還損失引当金は、利息制限法の上限金利を超過する貸付金利息の返還請求に備えるため、過去の返還実績等を勘案した見積返還額を計上しております。

(12) 偶発損失引当金の計上基準

偶発損失引当金は、信用保証協会保証付融資の負担金支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。

(13) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から損益処理

なお、一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(14) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

当行の外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

(15) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金、日本銀行への預け金、当座預け金及び普通預け金であります。

(16) 消費税等の会計処理

当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税（以下、「消費税等」という。）の会計処理は、税抜方式によっております。

ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は、当連結会計年度の費用並びにその他資産（繰延消費税等）に計上し、繰延消費税等については法人税法に定める期間により償却しております。

(連結貸借対照表関係)

1. 無担保の消費貸借契約（債券貸借取引）により貸し付けている有価証券が、「有価証券」中の国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
10,370百万円	10,268百万円

2. 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
破綻先債権額	439百万円	1,109百万円
延滞債権額	34,474百万円	36,527百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（1965年政令第97号）第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3. 貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
3カ月以上延滞債権額	29百万円	26百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
貸出条件緩和債権額	5,507百万円	7,571百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5. 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
合計額	40,450百万円	45,234百万円

なお、上記2. から5. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	7,344百万円	8,249百万円

7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	58,070百万円	67,709百万円
現金預け金	87百万円	108百万円
計	58,158百万円	67,818百万円
担保資産に対応する債務		
預金	2,098百万円	2,538百万円
債券貸借取引受入担保金	20,000百万円	29,483百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
有価証券	13,858百万円	390百万円

また、その他資産には、金融商品等差入担保金、中央清算機関差入証拠金及び保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
金融商品等差入担保金	3,082百万円	3,082百万円
中央清算機関差入証拠金	百万円	10,000百万円
保証金	765百万円	741百万円

8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
融資未実行残高	399,228百万円	385,939百万円
うち原契約期間が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取 消可能なもの)	329,981百万円	312,613百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9. 土地の再評価に関する法律（1998年3月31日公布法律第34号）に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日

1998年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令（1998年3月31日公布政令第119号）第2条第1号に定める当該事業用土地の近隣の地価公示法、同条第4号に定める路線価及び同条第5号に定める不動産鑑定評価に基づいて、（奥行価格補正、時点修正、近隣売買事例による補正等）合理的な調整を行って算出。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の期末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	1,478百万円	1,485百万円

10. 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
減価償却累計額	16,481百万円	17,413百万円

11. 有形固定資産の圧縮記帳額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
圧縮記帳額	412百万円	412百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額)	(百万円)	(百万円)

12. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	16,241百万円	22,180百万円

(連結損益計算書関係)

1. その他の経常収益には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
株式等売却益	1,362百万円	890百万円
償却債権取立益	275百万円	315百万円
債権売却益	383百万円	0百万円

2. 営業経費には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料・手当	14,319百万円	14,125百万円
外注委託料	3,167百万円	3,161百万円

3. その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
貸出金償却	467百万円	395百万円
株式等売却損	132百万円	155百万円

4. 減損損失

営業活動によるキャッシュ・フローの低下及び地価の下落により投資額の回収が見込めなくなった以下の資産について、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

地域	主な用途	種類	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) 減損損失額	種類	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日) 減損損失額
茨城県内	営業店舗	土地及び建物等 (4カ店)	21百万円	土地及び建物等 (3カ店)	34百万円
"	遊休資産	土地 (6カ所)	22百万円	土地 (6カ所)	58百万円
茨城県外	営業店舗		百万円	土地及び建物 (2カ店)	70百万円
合計			43百万円		163百万円

(グルーピングの方法)

当行の営業店舗については、管理会計上の最小区分である営業店単位(ただし、出張所は母店に合算。また、連携して営業を行っている営業店グループは当該グループ単位)としており、遊休資産については、各資産を各々独立した単位としております。また、連結子会社については、各社を1つの単位としております。

(回収可能価額)

減損損失の測定に使用した回収可能価額は正味売却価額であり、正味売却価額は不動産鑑定評価額から処分費用見込額を控除して算定しております。

(連結包括利益計算書関係)

1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	203	1,623
組替調整額	1,004	757
税効果調整前	800	865
税効果額	69	355
その他有価証券評価差額金	731	510
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	468	224
組替調整額	186	11
税効果調整前	654	212
税効果額	199	64
退職給付に係る調整額	454	148
その他の包括利益合計	1,186	362

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	82,553			82,553	
第四種優先株式	70,000			70,000	
合計	152,553			152,553	
自己株式					
普通株式	15	2		18	(注)
合計	15	2		18	

(注) 普通株式の自己株式の増加は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年5月12日 取締役会	普通株式	412	5	2017年3月31日	2017年6月8日
	第四種優先株式	38	0.55	2017年3月31日	2017年6月8日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年5月14日 取締役会	普通株式	412	利益剰余金	5	2018年3月31日	2018年6月7日
	第四種優先株式	21	利益剰余金	0.30	2018年3月31日	2018年6月7日

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	82,553			82,553	
第四種優先株式	70,000			70,000	
合計	152,553			152,553	
自己株式					
普通株式	18	2		20	(注)
合計	18	2		20	

(注) 普通株式の自己株式の増加は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年5月14日 取締役会	普通株式	412	5	2018年3月31日	2018年6月7日
	第四種優先株式	21	0.30	2018年3月31日	2018年6月7日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年5月13日 取締役会	普通株式	412	利益剰余金	5	2019年3月31日	2019年6月6日
	第四種優先株式			0	2019年3月31日	2019年6月6日

(注) 第四種優先株式の配当金については、2018年7月9日に預金保険機構が公表しました震災特例金融機関等の「優先配当年率としての資金調達コスト(平成29年度)」により算出した額としており、当該「優先配当年率としての資金調達コスト(平成29年度)」は0.00%であるため配当金の総額および1株当たり配当額は0円としております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金預け金勘定	161,941百万円	226,881百万円
通知預け金	17百万円	17百万円
定期預け金	1,258百万円	1,258百万円
その他の預け金	6,227百万円	8,925百万円
現金及び現金同等物	154,438百万円	216,679百万円

(リース取引関係)

該当ありません。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、銀行業務にかかる貸出金及び預金のほか、コールマネー、コールローン等を有しており、社債等による資金調達を行っております。また、付随業務として、有価証券投資を行っております。このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響が生じないように、資産及び負債の総合的管理(ALM)を実施しております。また、お客さまとの取引や資産・負債に係る市場リスク等をヘッジする目的でデリバティブ取引を行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として貸出金、預金、有価証券等であり、把握するリスクは、信用リスク、市場リスク、流動性リスク、オペレーショナル・リスクがあります。

信用リスクとは、取引先の財務状況の悪化等により、資産の価値が減少ないし消失し、銀行が損失を被るリスクをいいます。

市場リスクとは、市場のさまざまなリスク要因の変動によって損失が発生するリスクをいいます。市場の変動によって生じるリスクには、金利リスク、価格変動リスク、為替リスク等があります。

流動性リスクとは、資金の運用と調達の間ミスマッチや予期しない資金の流出等により資金不足になるリスクをいいます。

オペレーショナル・リスクとは、内部プロセス・人・システムが不適切であることもしくは機能しないこと、または外生的要因事象に起因して、当行が損失を被るリスクをいいます。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスクの管理

当行では、「信用リスク管理規程」を制定し、連結子会社が有する与信等も含めてリスクの分散・軽減とリスク・リターン管理を実施することを通じ、資産の健全性を維持し効率的な配分・運用を図っております。また、最適な与信ポートフォリオの構築をめざすとともに、「信用格付」、「自己査定」を通じた信用供与にかかるリスクを客観的かつ計量的に把握する「信用リスク計量化」に取り組んでおります。なお、計測した信用リスク量については、信用リスク管理部署が取りまとめ、信用リスク小委員会での協議を経て、リスク管理委員会並びに常務会への報告を行っております。

市場リスクの管理

当行では、「市場リスク管理規程」を制定し、経営方針に基づいて、市場リスク管理の重要性を十分認識し、リスクを統合的に把握し適切にコントロールしながら安定的な収益を確保できる運営に取り組むことを基本方針としています。具体的には、ALM(Asset Liability Management)の手法を取り入れており、金利リスク、為替リスク、価格変動リスク等のコントロールを実施しております。

一方、業務管理面では、市場取引部署(フロントオフィス)と市場事務管理部署(バックオフィス)を明確に分離し、さらに市場リスクを担当するリスク統括部署(ミドルオフィス)を設置し、相互牽制機能を確保しております。

() 金利リスクの管理

市場リスクを適切にコントロールするため、半期ごとに常務会で、信用リスク及びオペレーショナル・リスクを含めた銀行全体のリスク許容限度内で配分された配賦資本の範囲内で、各業務別のポジション枠(投資額または保有額の上限)を決定しております。各部署は、このリスク・リミットルールに基づき、機動的かつ効率的に市場取引を行い、毎月のALM委員会や都度の常務会等で報告・モニタリングを実施しております。このように市場取引の多様化・複雑化に適切に対応するとともに、自己資本比率規制に基づく、アウトライヤー基準と呼ばれる金利リスクの限度管理に対処するため、将来の金利変動に対する厳格なリスク管理を行っております。

() 為替リスクの管理

当行は、為替相場の変動リスクをヘッジする目的で為替予約取引を利用しております。

() 価格変動リスクの管理

経営方針に基づいて、市場関連リスク管理の重要性を十分認識し、リスクを総合的に把握し適切にコントロールしながら安定的な収益を確保できる運営に取り組んでおります。

投資金額については、先行きの金利や株価等の見通しに基づく期待収益率と、相場変動リスク及び運用対象間の相関関係を考慮した市場部門のリスク・リターンを検討し、常務会で決定しております。

() デリバティブ取引

デリバティブ取引を行うにあたっては、当行で定めた取引目的・取引種類・取引量・損失限度額・報告などの適用基準があり、これに基づいて取り組んでおります。

実務的には、取引実施部署と事務管理部署とを明確に分離し、相互牽制を行っております。また、取引状況は、日次あるいは月次で報告する体制としております。

() 市場リスクに係る定量的情報

当行グループの市場リスク量として使用しているVaRの算定にあたっては、分散共分散法(原則として、保有期間60日(政策投資株式は120日、売買目的有価証券は1日)、信頼水準99%、観測期間1年)を採用しております。

2019年3月31日(連結決算日)現在で、当行グループの市場リスク量(損失額の推定値)は、全体で104億円(前連結会計年度は121億円)であります。

なお、当行グループでは、モデルが算出するVaRと実際の損失を比較するバックテストを実施しております。

また、VaRは、過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測したものであり、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

資金調達に係る流動性リスクの管理

当行では、「流動性リスク管理規程」に基づきALM委員会、リスク管理委員会をはじめとした諸会議を通じて、当行全体の資金繰り状況及び見通しの把握に努め、不測の事態を想定した対策を講じております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。

当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません（注2）参照。

また、連結貸借対照表計上額の重要性が乏しい科目については、記載を省略しております。

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	161,941	161,941	
(2) 有価証券			
満期保有目的の債券	69,403	72,355	2,952
其他有価証券	482,283	482,283	
(3) 貸出金	1,633,318		
貸倒引当金(*1)	12,166		
	1,621,151	1,652,721	31,569
資産計	2,334,780	2,369,301	34,521
(1) 預金	2,275,005	2,275,238	232
(2) 債券貸借取引受入担保金	20,000	22,587	2,587
負債計	2,295,005	2,297,825	2,820
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	1,388	1,388	
ヘッジ会計が適用されているもの			
デリバティブ取引計	1,388	1,388	

(*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(*2) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	226,881	226,881	
(2) 有価証券			
満期保有目的の債券	66,754	69,754	2,999
其他有価証券	388,822	388,822	
(3) 貸出金	1,646,779		
貸倒引当金(*1)	12,533		
	1,634,245	1,671,847	37,601
資産計	2,316,703	2,357,305	40,601
(1) 預金	2,245,886	2,246,031	144
(2) 債券貸借取引受入担保金	29,483	32,208	2,725
負債計	2,275,370	2,278,240	2,869
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(257)	(257)	
ヘッジ会計が適用されているもの			
デリバティブ取引計	(257)	(257)	

(*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(* 2) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、() で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資産

(1) 現金預け金

満期のない預け金及び満期のある預け金のうち預入期間1年以内の預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金のうち預入期間1年を超えるものについては、預入期間に基づく区分ごとに、新規に預け金を行った場合に想定される適用金利で割り引いた現在価値を算定しております。なお、譲渡性預け金は、取引金融機関から提示された価格によっております。

(2) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

自行保証付私募債は、ディスカウント・キャッシュ・フロー法により現在価値を算出してしております。その割引率は、内部格付、期間ごとに、同様の新規取扱いを行った場合に想定される利率に基づいて算出してしております。なお、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する自行保証付私募債については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項は「(有価証券関係)」に記載しております。

(3) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異ならない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

負債

(1) 預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。

また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) 債券貸借取引受入担保金

債券貸借取引受入担保金の時価は、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、残存期間に応じた市場利子率に、格付機関による信用格付を基に推計した当行の信用リスクを上乗せした利率を用いております。なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(2) その他有価証券」には含まれておりません。

(単位: 百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式(*1)(*2)	1,228	1,378
組合出資金(*3)	2,310	2,153
私募投資信託(REIT)	14,507	14,493
合計	18,046	18,026

(*1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。

(*2) 前連結会計年度において、非上場株式について13百万円減損処理を行っております。

当連結会計年度において、非上場株式について7百万円減損処理を行っております。

(*3) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	124,562					
有価証券	48,252	118,207	113,689	51,943	129,138	55,378
満期保有目的の債券	2,495	3,501	29,576	18,529	4,044	10,206
うち国債	1,000	1,000	13,500	16,500	1,000	1,000
地方債	1,495	2,501	12,299	2,029	3,044	9,206
社債			3,777			
その他有価証券のうち 満期があるもの	45,756	114,706	84,112	33,413	125,094	45,172
うち国債	8,500	40,500	12,500		7,000	2,300
地方債	3,965	4,612	28,651	2,638	17,096	10,815
社債	19,714	26,579	16,879	3,595	4,731	24,430
貸出金(*)	327,370	283,497	210,763	157,037	189,922	407,924
合計	500,184	401,705	324,452	208,980	319,061	463,302

(*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めないもの及び、期間の定めのないもの56,803百万円は含めておりません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	190,832					
有価証券	44,641	116,740	70,970	44,171	101,686	51,259
満期保有目的の債券	2,495	20,440	18,156	11,529	4,469	8,766
うち国債	1,000	9,000	11,500	9,500	1,500	500
地方債	1,495	8,640	5,679	2,029	2,969	8,266
社債		2,800	977			
その他有価証券のうち 満期があるもの	42,145	96,300	52,814	32,642	97,217	42,493
うち国債	12,000	29,000	3,500			2,300
地方債	3,343	19,928	15,853	4,822	27,333	15,066
社債	12,503	21,412	14,919	1,721	5,131	21,907
貸出金(*)	332,585	286,744	209,971	163,156	170,815	423,863
合計	568,059	403,484	280,942	207,328	272,502	475,123

(*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めないもの及び、期間の定めのないもの59,643百万円は含めておりません。

(注4) 預金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*) 債券貸借取引受入担保金	2,079,744	145,284	40,848	2,847	6,280 20,000	
合計	2,079,744	145,284	40,848	2,847	26,280	

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*) 債券貸借取引受入担保金	2,043,515 9,483	149,837	44,645	6,171	1,715 20,000	
合計	2,052,999	149,837	44,645	6,171	21,715	

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(有価証券関係)

1. 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「商品有価証券」、「現金預け金」中の譲渡性預け金及び「買入金銭債権」中の信託受益権を含めて記載しております。
2. 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1. 売買目的有価証券

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
連結会計年度の損益に含まれた評価差額	3	3

2. 満期保有目的の債券

前連結会計年度(2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
時価が連結貸借対照表 計上額を超えるもの	国債	34,728	36,671	1,943
	地方債	30,409	31,281	872
	社債	3,774	3,910	136
	その他			
	外国債券			
	その他			
	小計	68,911	71,864	2,952
時価が連結貸借対照表 計上額を超えないもの	国債			
	地方債	491	491	0
	社債			
	その他	3,000	3,000	
	外国債券			
	その他	3,000	3,000	
	小計	3,491	3,491	0
合計		72,403	75,355	2,952

当連結会計年度(2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
時価が連結貸借対照表 計上額を超えるもの	国債	33,626	35,390	1,764
	地方債	29,352	30,482	1,129
	社債	3,774	3,880	105
	その他			
	外国債券			
	その他			
	小計	66,754	69,754	2,999
時価が連結貸借対照表 計上額を超えないもの	国債			
	地方債			
	社債			
	その他	6,000	6,000	
	外国債券			
	その他	6,000	6,000	
	小計	6,000	6,000	
合計		72,754	75,754	2,999

3. その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	6,655	4,412	2,242
	債券	183,853	181,143	2,709
	国債	68,019	66,976	1,042
	地方債	44,939	43,956	982
	社債	70,894	70,210	684
	その他	84,757	83,158	1,599
	外国債券	61,420	60,828	591
	その他	23,337	22,329	1,007
	小計	275,265	268,714	6,551
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	1,576	1,640	63
	債券	53,827	54,388	560
	国債	4,282	4,362	79
	地方債	23,921	24,219	297
	社債	25,623	25,806	183
	その他	156,523	161,597	5,073
	外国債券	74,953	76,872	1,919
	その他	81,569	84,724	3,154
	小計	211,927	217,625	5,698
合計		487,193	486,340	853

当連結会計年度(2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	2,527	1,479	1,047
	債券	186,141	183,851	2,289
	国債	47,232	46,765	466
	地方債	77,782	76,669	1,112
	社債	61,126	60,416	709
	その他	79,660	77,981	1,679
	外国債券	54,017	53,372	644
	その他	25,643	24,608	1,035
	小計	268,329	263,312	5,016
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	1,621	1,961	339
	債券	27,434	27,560	125
	国債	298	302	4
	地方債	10,007	10,047	40
	社債	17,129	17,210	80
	その他	96,342	99,174	2,832
	外国債券	36,097	36,584	487
	その他	60,245	62,589	2,344
	小計	125,399	128,696	3,297
合計		393,728	392,008	1,719

4. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	24,515	1,362	132
債券	41,049	169	309
国債	12,027	49	294
地方債	1,300	4	
社債	27,722	115	15
その他	25,886	293	808
外国債券	23,599	179	697
その他	2,286	113	110
合計	91,451	1,824	1,250

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	13,168	890	155
債券	36,522	757	
国債	18,323	299	
地方債	5,082	212	
社債	13,116	244	
その他	55,511	471	1,121
外国債券	45,187	218	690
その他	10,324	253	431
合計	105,202	2,119	1,277

5. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

前連結会計年度及び当連結会計年度における減損処理額はありません。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、期末月1ヶ月平均時価（債券は連結決算期末日時価）が取得原価に比べて50%以上下落した銘柄については一律減損処理を行い、また、期末月1ヶ月平均時価（債券は連結決算期末日時価）が30%以上50%未満下落した銘柄においては、過去の一定期間における時価の推移並びに当該発行会社の業績等により時価の回復可能性を判断のうえ、時価と取得原価の差額を償却するものとしております。

(金銭の信託関係)

1. 運用目的の金銭の信託

前連結会計年度(2018年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額(百万円)
運用目的の金銭の信託	2,970	61

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額(百万円)
運用目的の金銭の信託	3,000	102

2. 満期保有目的の金銭の信託

該当ありません。

3. その他の金銭の信託（運用目的及び満期保有目的以外）

該当ありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度(2018年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	853
その他有価証券	853
その他の金銭の信託	
()繰延税金負債	69
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	784
()非支配株主持分相当額	
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	784

当連結会計年度(2019年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	1,719
その他有価証券	1,719
その他の金銭の信託	
()繰延税金負債	425
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	1,294
()非支配株主持分相当額	
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	1,294

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

該当ありません。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	種類	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超のもの(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
金融商品取引所	通貨先物 売建				
	買建				
	通貨オプション 売建				
	買建				
店頭	通貨スワップ 為替予約 売建	92,318		1,388	1,388
	買建	91		0	0
	通貨オプション 売建				
	買建				
	その他 売建				
	買建				
	合 計			1,388	1,388

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2. 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超のもの(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
金融商品取引所	通貨先物 売建				
	買建				
	通貨オプション 売建				
	買建				
店頭	通貨スワップ 為替予約 売建	57,800		257	257
	買建	70		0	0
	通貨オプション 売建				
	買建				
	その他 売建				
	買建				
	合 計			257	257

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2. 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

- (3) 株式関連取引
該当ありません。
- (4) 債券関連取引
該当ありません。
- (5) 商品関連取引
該当ありません。
- (6) クレジット・デリバティブ取引
該当ありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

該当ありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当行は、従業員の退職給付に充てるため、確定給付制度としてキャッシュバランスプランを基本とした確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を採用するほか、確定拠出年金制度を採用しております。

確定給付企業年金制度では、給与と勤務期間に基づいた年金を支給しております。

退職一時金制度では、退職給付として、給与と勤務期間に基づいた一時金を支給しております。なお、退職一時金制度の一部には退職給付信託を設定しており、積立型制度となっております。

確定拠出年金制度では、給与に基づいた掛金を拠出しております。

一部の連結子会社は、退職一時金制度及び確定拠出年金制度を採用しております。なお、退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く。）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	15,789	15,668
勤務費用	429	442
利息費用	69	59
数理計算上の差異の発生額	229	190
退職給付の支払額	846	777
その他	2	
退職給付債務の期末残高	15,668	15,583

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	14,678	15,768
期待運用収益	251	267
数理計算上の差異の発生額	697	33
事業主からの拠出額	793	777
退職給付の支払額	651	563
年金資産の期末残高	15,768	16,215

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	15,668	15,583
年金資産	15,768	16,215
	100	631
非積立型制度の退職給付債務		
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	100	631

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る負債	1,793	1,636
退職給付に係る資産	1,894	2,268
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	100	631

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	429	442
利息費用	69	59
期待運用収益	251	267
数理計算上の差異の費用処理額	186	11
その他	0	0
確定給付制度に係る退職給付費用	433	247

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
数理計算上の差異	654	212
合計	654	212

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
未認識数理計算上の差異	1,049	836
合計	1,049	836

(7) 年金資産に関する事項

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
株式	41%	39%
債券	30%	29%
一般勘定	12%	12%
その他	17%	20%
合計	100%	100%

(注) 年金資産合計には、退職一時金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度15%、当連結会計年度15%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率は、年金資産を構成する有価証券等の過去の運用実績や、運用方針及び市場の動向等を考慮したうえで、それぞれの資産から長期的に期待される収益に基づき設定しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
割引率	0.38%	0.22%
長期期待運用収益率	2.00%	2.00%

(注) 当行は、退職給付債務の計算の基礎に「予想昇給率」を組み入れておりません。

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	78	89
退職給付費用	17	15
退職給付の支払額	6	8
退職給付に係る負債の期末残高	89	96

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
非積立型制度の退職給付債務	89	96
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	89	96

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る負債	89	96
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	89	96

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度 17百万円 当連結会計年度 15百万円

4. 確定拠出制度

当行及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は前連結会計年度113百万円、当連結会計年度113百万円であり、ます。

(ストック・オプション等関係)

該当ありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	10,821 百万円	10,915 百万円
繰越欠損金(注2)	4,159	3,121
有価証券償却	1,962	1,951
退職給付に係る負債	1,010	795
減価償却超過額	1,056	1,029
その他有価証券評価差額金	1,732	1,002
土地に係る減損損失	294	329
合併による土地評価損	684	677
その他	1,000	941
繰延税金資産小計	22,724	20,765
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注2)		3,121
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額		12,439
評価性引当額小計(注1)	16,344	15,560
繰延税金資産合計	6,379	5,204
繰延税金負債		
合併による貸出金等評価益	604	556
資産除去債務	12	11
退職給付信託設定益	215	215
その他有価証券評価差額金	1,801	1,427
退職給付に係る調整累計額	319	254
繰延税金負債合計	2,953	2,465
繰延税金資産の純額	3,426 百万円	2,739 百万円

(注1) 評価性引当額が784百万円減少しております。この減少の主な要因は、税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額が1,038百万円減少したこと等によるものであります。

(注2) 税務上の繰越欠損金及び繰延税金資産の繰越期限別の金額
当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠損金(*1)	3	5	3,085		13	12	3,121
評価性引当額	3	5	3,085		13	12	3,121
繰延税金資産							

(*1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.6 %	30.4 %
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.7	1.8
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.6	1.4
住民税均等割等	1.1	2.9
評価性引当額の増減によるもの	3.4	4.3
その他	1.3	1.4
税効果会計適用後の法人税等の負担率	36.5 %	39.4 %

3. 当行グループの繰延税金資産については、基本的に当連結会計年度末において5年間の長期収益計画に基づいて計上しております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度から適用し、税効果関係注記を変更しております。

税効果関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(資産除去債務関係)

資産除去債務は重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当行グループの報告セグメントは、当行グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、常務会等において経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当行グループは、銀行業を中心に事務受託業、信用保証業、与信事務受託業、システム受託業、コンサルティング業及び投資業の金融サービスに係る事業を行っております。

当行グループは、当行が営む「銀行業」及び連結子会社の筑波信用保証(株)が営む「信用保証業、与信事務受託業」を報告セグメントとしております。

「銀行業」は、預金業務、貸出業務、内国為替業務、外国為替業務等を行っております。

「信用保証業、与信事務受託業」は、個人向け貸出の保証業務、担保不動産の調査・評価業務等を行っております。

2. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一の方法により算定しております。

なお、セグメント間の取引価額は第三者間の取引価額に基づいております。

3. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結 財務諸表 計上額
	銀行業	信用保証業、 与信事務受託 業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	40,037	455	40,492	113	40,606		40,606
セグメント間の内部経常収益	55	659	714	529	1,244	1,244	
計	40,092	1,115	41,207	643	41,851	1,244	40,606
セグメント利益又は損失()	4,459	569	5,029	12	5,016	83	4,933
セグメント資産	2,421,863	12,287	2,434,151	586	2,434,738	14,554	2,420,184
セグメント負債	2,316,174	8,160	2,324,334	119	2,324,454	13,719	2,310,734
その他の項目							
減価償却費	2,110	10	2,121	0	2,122		2,122
資金運用収益	27,485	0	27,486	0	27,486	20	27,466
資金調達費用	912		912		912	0	911
特別利益	10		10		10		10
(固定資産処分益)	10		10		10		10
特別損失	158		158		158		158
(固定資産処分損)	115		115		115		115
(減損損失)	43		43		43		43
税金費用	1,552	188	1,740	7	1,748		1,748
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	3,388	0	3,389	1	3,390		3,390

(注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、事務受託業、システム受託業、コンサルティング業及び投資業を含んでおります。

3. 調整額は次のとおりであります。

(1)セグメント利益又は損失()の調整額 83百万円は、セグメント間取引消去であります。

(2)セグメント資産の調整額 14,554百万円は、主にセグメント間取引消去であります。

(3)セグメント負債の調整額 13,719百万円は、主にセグメント間取引消去であります。

(4)資金運用収益の調整額 20百万円は、セグメント間取引消去であります。

(5)資金調達費用の調整額 0百万円は、セグメント間取引消去であります。

4. セグメント利益又は損失()は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

当連結会計年度(自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結 財務諸表 計上額
	銀行業	信用保証業、 与信事務受託 業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	37,551	434	37,986	132	38,119		38,119
セグメント間の内部経常収益	34	384	418	498	917	917	
計	37,586	819	38,405	631	39,036	917	38,119
セグメント利益又は損失()	1,796	305	2,101	41	2,060	64	1,995
セグメント資産	2,403,672	12,169	2,415,842	700	2,416,543	14,915	2,401,627
セグメント負債	2,296,971	7,802	2,304,773	129	2,304,903	13,736	2,291,167
その他の項目							
減価償却費	2,165	9	2,175	1	2,176		2,176
資金運用収益	26,940	0	26,941	0	26,941	0	26,940
資金調達費用	921		921		921	0	920
特別利益	2		2		2		2
(固定資産処分益)	2		2		2		2
特別損失	209		209		209		209
(固定資産処分損)	45		45		45		45
(減損損失)	163		163		163		163
税金費用	632	65	697	6	704		704
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	3,554	0	3,554	1	3,556		3,556

(注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、事務受託業、システム受託業、コンサルティング業及び投資業を含んでおります。

3. 調整額は次のとおりであります。

(1)セグメント利益又は損失()の調整額 64百万円は、セグメント間取引消去であります。

(2)セグメント資産の調整額 14,915百万円は、主にセグメント間取引消去であります。

(3)セグメント負債の調整額 13,736百万円は、主にセグメント間取引消去であります。

(4)資金運用収益の調整額 0百万円は、セグメント間取引消去であります。

(5)資金調達費用の調整額 0百万円は、セグメント間取引消去であります。

4. セグメント利益又は損失()は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券 投資業務	役務取引業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	24,558	7,061	7,815	1,171	40,606

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1. サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券 投資業務	役務取引業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	21,744	8,004	7,432	938	38,119

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計
	銀行業	信用保証業、 与信事務受託業	計		
減損損失	43		43		43

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計
	銀行業	信用保証業、 与信事務受託業	計		
減損損失	163		163		163

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引について記載すべき重要なものではありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	901円77銭	914円31銭
1株当たり当期純利益	36円54銭	13円13銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	16円63銭	4円98銭

(注) 1. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	109,449	110,460
純資産の部の合計額から控除する金額	百万円	35,021	35,000
(うち優先株式の払込金額)	百万円	35,000	35,000
(うち優先配当額)	百万円	21	
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	74,428	75,460
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数	千株	82,535	82,532

(注) 2. 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	3,037	1,083
普通株主に帰属しない金額	百万円	21	
うち優先配当額	百万円	21	
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	3,016	1,083
普通株式の期中平均株式数	千株	82,536	82,534
潜在株式調整後1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益調整額	百万円	21	
うち優先配当額	百万円	21	
普通株式増加数	千株	100,011	135,090
うち優先株式	千株	100,011	135,090

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

該当事項はありません。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、資産除去債務明細表の記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
経常収益(百万円)	10,028	19,162	28,245	38,119
税金等調整前四半期(当期)純利益金額(百万円)	664	1,121	1,105	1,788
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額(百万円)	306	774	647	1,083
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	3.71	9.38	7.85	13.13

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 又は1株当たり四半期純損失金額() (円)	3.71	5.67	1.53	5.28

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
現金預け金	160,690	225,631
現金	37,378	36,049
預け金	8 123,312	8 189,582
買入金銭債権	5,754	5,829
商品有価証券	700	453
商品国債	187	202
商品地方債	513	251
金銭の信託	2,970	3,000
有価証券	1, 2, 8, 11 571,248	1, 2, 8, 11 475,116
国債	107,030	81,156
地方債	99,761	117,143
社債	100,292	82,030
株式	10,820	6,755
その他の証券	253,344	188,030
貸出金	3, 4, 5, 6, 9 1,632,853	3, 4, 5, 6, 9 1,646,313
割引手形	7 7,344	7 8,249
手形貸付	114,646	120,645
証書貸付	1,442,785	1,446,536
当座貸越	68,077	70,881
外国為替	6,811	5,349
外国他店預け	6,797	5,342
取立外国為替	14	7
その他資産	17,438	18,239
未決済為替貸	8	7
前払費用	1,427	433
未収収益	2,598	2,253
金融派生商品	1,497	173
金融商品等差入担保金	3,082	3,082
その他の資産	8 8,824	8 12,289
有形固定資産	10 23,787	10 23,796
建物	10,728	11,744
土地	10,479	10,174
建設仮勘定	830	34
その他の有形固定資産	1,749	1,843
無形固定資産	3,036	4,139
ソフトウェア	1,701	2,203
その他の無形固定資産	1,335	1,936
前払年金費用	829	1,567
繰延税金資産	3,723	2,982
支払承諾見返	1,660	1,267
貸倒引当金	9,642	10,012
資産の部合計	2,421,863	2,403,672

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
預金	8 2,286,223	8 2,256,981
当座預金	41,682	40,698
普通預金	1,198,508	1,234,265
貯蓄預金	12,498	12,426
通知預金	2,296	2,363
定期預金	1,006,901	944,741
定期積金	14,487	13,187
その他の預金	9,848	9,297
債券貸借取引受入担保金	8 20,000	8 29,483
外国為替	77	164
売渡外国為替	21	14
未払外国為替	55	150
その他負債	4,595	5,494
未決済為替借	20	11
未払法人税等	396	398
未払費用	1,351	1,231
前受収益	1,137	1,275
給付補填備金	62	62
金融派生商品	109	430
資産除去債務	120	89
その他の負債	1,398	1,994
賞与引当金	818	795
退職給付引当金	1,803	1,800
執行役員退職慰労引当金	44	49
睡眠預金払戻損失引当金	280	252
ポイント引当金	14	13
利息返還損失引当金	0	-
偶発損失引当金	295	310
再評価に係る繰延税金負債	357	357
支払承諾	1,660	1,267
負債の部合計	2,316,174	2,296,971

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
純資産の部		
資本金	48,868	48,868
資本剰余金	30,447	30,447
資本準備金	9,376	9,376
その他資本剰余金	21,070	21,070
利益剰余金	25,182	25,685
利益準備金	694	781
その他利益剰余金	24,488	24,904
繰越利益剰余金	24,488	24,904
自己株式	6	6
株主資本合計	104,492	104,994
その他有価証券評価差額金	784	1,294
土地再評価差額金	413	413
評価・換算差額等合計	1,197	1,707
純資産の部合計	105,689	106,701
負債及び純資産の部合計	2,421,863	2,403,672

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
経常収益	40,092	37,586
資金運用収益	27,485	26,940
貸出金利息	22,208	21,074
有価証券利息配当金	5,190	5,778
コールローン利息	0	10
預け金利息	37	34
その他の受入利息	48	63
役務取引等収益	7,297	6,914
受入為替手数料	1,462	1,437
その他の役務収益	5,834	5,477
その他業務収益	2,345	1,637
国債等債券売却益	462	1,229
金融派生商品収益	134	-
その他の業務収益	1,748	408
その他経常収益	2,964	2,093
償却債権取立益	275	315
株式等売却益	1,362	890
金銭の信託運用益	68	107
その他の経常収益	1,258	779
経常費用	35,649	35,810
資金調達費用	912	921
預金利息	352	274
コールマネー利息	1	0
債券貸借取引支払利息	491	647
借入金利息	0	0
金利スワップ支払利息	68	-
その他の支払利息	0	-
役務取引等費用	3,897	3,909
支払為替手数料	399	401
その他の役務費用	3,497	3,508
その他業務費用	2,043	2,385
外国為替売買損	924	1,263
商品有価証券売買損	0	0
国債等債券売却損	1,118	1,121
営業経費	27,238	26,382
その他経常費用	1,558	2,210
貸倒引当金繰入額	437	1,275
貸出金償却	467	395
株式等売却損	132	155
株式等償却	13	4
その他の経常費用	508	380
経常利益	4,443	1,776

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
特別利益	10	2
固定資産処分益	10	2
特別損失	158	209
固定資産処分損	115	45
減損損失	43	163
税引前当期純利益	4,295	1,568
法人税、住民税及び事業税	262	246
法人税等調整額	1,289	386
法人税等合計	1,552	632
当期純利益	2,743	936

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本								
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	48,868	9,376	21,070	30,447	604	22,285	22,889	5	102,200
当期変動額									
剰余金の配当					90	541	451		451
当期純利益						2,743	2,743		2,743
自己株式の取得								0	0
土地再評価差額金の取崩						0	0		0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）									
当期変動額合計	-	-	-	-	90	2,202	2,292	0	2,291
当期末残高	48,868	9,376	21,070	30,447	694	24,488	25,182	6	104,492

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	52	414	466	102,666
当期変動額				
剰余金の配当				451
当期純利益				2,743
自己株式の取得				0
土地再評価差額金の取崩				0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	731	0	730	730
当期変動額合計	731	0	730	3,022
当期末残高	784	413	1,197	105,689

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本								自己株式	株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金					
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金 合計			
当期首残高	48,868	9,376	21,070	30,447	694	24,488	25,182	6	104,492	
当期変動額										
剰余金の配当					86	520	433		433	
当期純利益						936	936		936	
自己株式の取得								0	0	
土地再評価差額金の取崩						0	0		0	
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)										
当期変動額合計	-	-	-	-	86	416	502	0	502	
当期末残高	48,868	9,376	21,070	30,447	781	24,904	25,685	6	104,994	

	評価・換算差額等			純資産 合計
	その他有価 証券評価差 額金	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	784	413	1,197	105,689
当期変動額				
剰余金の配当				433
当期純利益				936
自己株式の取得				0
土地再評価差額金の取崩				0
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	510	0	509	509
当期変動額合計	510	0	509	1,011
当期末残高	1,294	413	1,707	106,701

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）により行っております。

2. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

有形固定資産は、定率法（ただし、1998年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）並びに2016年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法）を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建 物：13年～50年

その他：5年～20年

(2) 無形固定資産

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間（5年）に基づいて償却しております。

5. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

6. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額のうち取立不能見込額を債権額から直接減額しており、その金額は24,326百万円（前事業年度末は23,934百万円）であります。

(2) 賞与引当金

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準により行っております。なお、数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から損益処理

(4) 執行役員退職慰労引当金

執行役員退職慰労引当金は、執行役員への退職慰労金の支払いに備えるため、執行役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当事業年度末までに発生していると認められる額を計上しております。

(5) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。

(6) ポイント引当金

ポイント引当金は、クレジットカード利用促進を目的とするポイント制度に基づき、クレジットカード会員に付与したポイントの使用により発生する費用に備えるため、ポイント使用実績等に基づく将来の使用見込額を計上しております。

(7) 利息返還損失引当金

利息返還損失引当金は、利息制限法の上限金利を超過する貸付金利の返還請求に備えるため、過去の返還実績等を勘案した見積返還額を計上しております。

(8) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、信用保証協会保証付融資の負担金支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。

7. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税（以下、「消費税等」という。）の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は、当事業年度の費用並びにその他の資産（繰延消費税等）に計上し、繰延消費税等については法人税法に定める期間により償却しております。

(貸借対照表関係)

1. 関係会社の株式又は出資金の総額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
株式	1,504百万円	1,504百万円
出資金	154百万円	285百万円

2. 無担保の消費貸借契約（債券貸借取引）により貸し付けている有価証券が、「有価証券」中の国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	10,370百万円	10,268百万円

3. 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
破綻先債権額	374百万円	1,062百万円
延滞債権額	34,075百万円	36,108百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（1965年政令第97号）第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

4. 貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
3カ月以上延滞債権額	29百万円	26百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

5. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
貸出条件緩和債権額	5,507百万円	7,571百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

6. 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
合計額	39,985百万円	44,768百万円

なお、上記3. から6. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

7. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	7,344百万円	8,249百万円

8. 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	58,070百万円	67,709百万円
預け金	87百万円	108百万円
計	58,158百万円	67,818百万円
担保資産に対応する債務		
預金	2,098百万円	2,538百万円
債券貸借取引受入担保金	20,000百万円	29,483百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保として、次のものを差し入れております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
有価証券	13,858百万円	390百万円

また、その他の資産には、中央清算機関差入証拠金及び保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
中央清算機関差入証拠金	百万円	10,000百万円
保証金	765百万円	741百万円

9. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
融資未実行残高	399,228百万円	385,939百万円
うち原契約期間が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で 取消可能なもの)	329,981百万円	312,613百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

10. 有形固定資産の圧縮記帳額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
圧縮記帳額 (当該事業年度の圧縮記帳額)	412百万円 (百万円)	412百万円 (百万円)

11. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	16,241百万円	22,180百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度（2018年3月31日）

該当ありません。

当事業年度（2019年3月31日）

該当ありません。

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式等の貸借対照表計上額
(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
子会社株式	1,504	1,504
関連会社株式		
組合出資金	154	285
合計	1,659	1,790

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	9,977 百万円	10,105 百万円
繰越欠損金	4,157	3,109
有価証券償却	1,962	1,951
退職給付引当金	990	774
減価償却超過額	1,056	1,028
その他有価証券評価差額金	1,732	1,002
土地に係る減損損失	294	329
合併による土地評価損	684	677
その他	975	925
繰延税金資産小計	21,831	19,906
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額		3,109
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額		11,603
評価性引当額	15,473	14,712
繰延税金資産合計	6,357	5,193
繰延税金負債		
合併による貸出金等評価益	604	556
資産除去債務	12	11
退職給付信託設定益	215	215
その他有価証券評価差額金	1,801	1,427
繰延税金負債合計	2,633	2,211
繰延税金資産の純額	3,723 百万円	2,982 百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.6 %	30.4 %
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.7	2.0
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.6	1.6
住民税均等割等	1.2	3.2
評価性引当額の増減によるもの	3.9	6.4
その他	0.3	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	36.1 %	40.3 %

3. 当行の繰延税金資産については、当事業年度末において5年間の長期収益計画に基づいて計上しております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当事業年度から適用し、税効果関係注記を変更しております。

税効果関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(1)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	21,059	1,758	307 (34)	22,511	10,767	701	11,744
土地	10,479	68	373 (106)	10,174			10,174
建設仮勘定	[765] 830	1,055	1,851	[765] 34			34
その他の有形固定資産	7,858 [5]	987	395 (15) [0]	8,450 [4]	6,607	609	1,843
有形固定資産計	40,228 [771]	3,870	2,928 (157) [0]	41,170 [770]	17,374	1,311	23,796
無形固定資産							
ソフトウェア	5,231	1,365	1,127	5,469	3,266	853	2,203
その他の無形固定資産	1,380	2,057	1,455 (6)	1,982	46	1	1,936
無形固定資産計	6,611	3,422	2,582 (6)	7,452	3,312	854	4,139

- (注) 1. 当期減少額欄における () 内は減損損失の計上額 (内書き) であります。
2. 当期首残高欄及び当期末残高欄における [] 内は、土地再評価差額 (繰延税金負債控除前) の残高であります。また、当期減少額欄における [] 内は、土地再評価差額 (繰延税金負債控除前) の減少であり、減損損失の計上等によるものであります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金					
一般貸倒引当金	2,911	2,995		2,911	2,995
個別貸倒引当金	6,731	7,016	906	5,825	7,016
賞与引当金	818	795	818		795
執行役員退職慰労引当金	44	15	10		49
睡眠預金払戻損失引当金	280	49	78		252
ポイント引当金	14	13		14	13
偶発損失引当金	295	310		295	310
計	11,097	11,197	1,812	9,047	11,434

(注1) 当期減少額 (その他) 欄に記載の減少額はそれぞれ次の理由によるものであります。

- 一般貸倒引当金・・・洗替による取崩額
- 個別貸倒引当金・・・回収及び洗替による取崩額
- ポイント引当金・・・洗替による取崩額
- 偶発損失引当金・・・洗替による取崩額

(注2) 前事業年度において記載していた「利息返還損失引当金」は、金額的な重要性が乏しくなったため全額取崩しております。

未払法人税等

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	396	862	858	1	398
未払法人税等	81	216	217	1	78
未払事業税	315	645	640		320

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	東京都中央区八重洲1丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部
株主名簿管理人	東京都中央区八重洲1丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社
取次所	
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	<p>当行の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告をすることができない場合は、水戸市において発行する茨城新聞および東京都において発行する日本経済新聞に掲載して行う。</p> <p>なお、電子公告は当行ホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりです。</p> <p>http://www.tsukubabank.co.jp/</p>
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注)1. 当行の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができません。

会社法第189条第2項各号に掲げる権利

会社法第166条第1項の規定による請求をする権利

株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利

株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

(注)2. 特別口座に記載されている単元未満株式の買取りにつきましては、日本証券代行株式会社にて取扱います。

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当行には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第94期）（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

2018年6月27日関東財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月27日関東財務局長に提出。

(3) 四半期報告書及び確認書

第95期第1四半期（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）

2018年8月10日関東財務局長に提出。

第95期第2四半期（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）

2018年11月26日関東財務局長に提出。

第95期第3四半期（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）

2019年2月8日関東財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書

2018年6月28日関東財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月20日

株式会社筑波銀行
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 寺 澤 豊

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 宮 田 世 紀

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社筑波銀行の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社筑波銀行及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社筑波銀行の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社筑波銀行が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管している。
 2. XBRLデータは監査の対象には含まれていない。

独立監査人の監査報告書

2019年 6月20日

株式会社筑波銀行
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 寺 澤 豊

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 宮 田 世 紀

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社筑波銀行の2018年4月1日から2019年3月31日までの第95期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社筑波銀行の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管している。
 2. XBRLデータは監査の対象には含まれていない。